道頓堀

十月號

次代の人々を鞭撻する

俳優藝術の創造性——

舞台人が語る道頓堀十年今昔

創刊十周年記念號

ウテナクリーム

燦々と肌美の映えるシーズン!!

レモンの果精でキメを細かにお肌を眞から美しくするレモンクリーム！

ウテナ水白粉

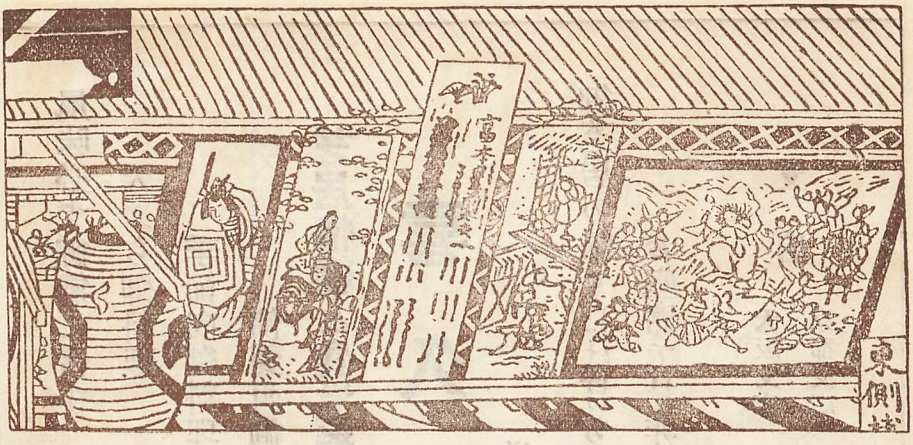
ウテナの水白粉は透明度があつて生地の色を生かします

八色（白、肌色、濃肌色、健康色、オークル一號、オークル二號、ナチスレル、ブルン

東京本郷

久保田商店

風味必ず御氣に召す
天ぷら御料理
季節向御料理
佛蘭西御料理
芝居情緒と食道樂
喜久屋食堂
道頓堀戎橋北詰
御芝居の歸りには打ち揃ふて
お座席で是非御會食を！
支店
大阪支店　心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋



★道頓堀十月號　目次★

トビラ　（長谷川小信氏藏）

フラグ

▼元祿忠臣藏　▼彦六大いに笑ふ　▼新道　▼紙幣　▼嬰兒殺し　▼醫者と商人
▼入斬り伊太郎　▼丁半　▼夜中から朝まで　▼道行念玉蔓　▼噛みついた娘　▼勸進帳
▼夜霧朝霧　▼花競四季壽　▼御所櫻堀川夜討　▼良辨杉由來　▼心中天網島　▼堅氣街道

俳優藝術の創造性

……中井駿二（一四）

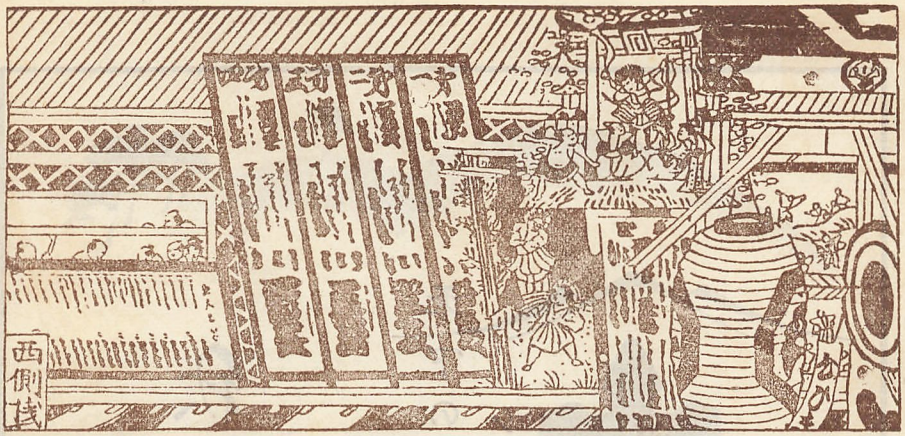
創刊十周年を祝して
道頓堀十年の今昔を語る

A. 再發……井上正夫（五二）
B. 思出を語る……都築文男（五五）
C. 道頓堀舟乘込み……水谷八重子（五六）

―主―と―し―て―大―阪―歌―舞―伎―の―こ―と―

若手俳優と覇氣……鎌谷來水（一七）
次代の人々……藤堂行（二一）
近時隨感……菱田正男（二二）
中村扇雀に期待……堂本寒星（二五）

★扇雀と菊次郎……大橋孝一郎（四九）
◇前進座の肉彈宣傳時代……橘小三郎（二八）
◇勸進帳の生命……河原崎長十郎（一九）



★藝テモノ語……柳家幽太郎（四五）
★名優と鼻……中井泰孝（五九）
私の歌舞伎考……笈川武夫（五一）
夢と現實と……中村翫右衛門（五八）
酒——劇場——デパート……豊田豊（五二）

ドウ◇女形……富田英三（二九）
ンセ◇ミス福岡賞インターヴユウ……千塚榮（三〇）
トボシ◇忠臣蔵……大槻たもつ（三一）
リヨ◇内侍は鈎る……妹背平三（三四）
ン◇青山福藏さんにきく東西大向ふ……櫓万平（三六）

◈傍白……大木戸徹（三八）
鑑賞の秋……（げんた生）（四〇）
秋の映畫欄……（四一）
お染半九郎……（四一）
風流小唄侍……（四二）

澤田氏と日比谷野外劇……俵藤丈夫（四八）

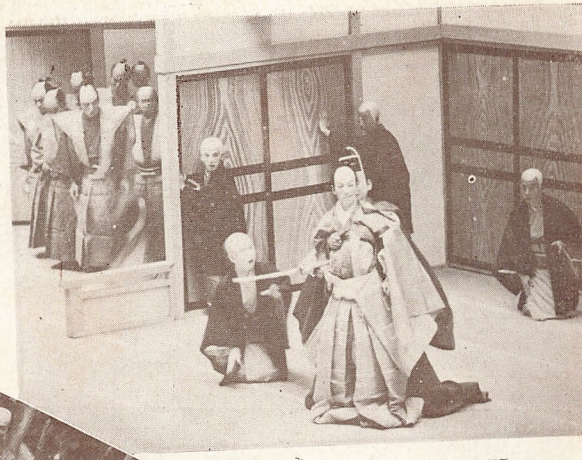
秋の心
年齢……行友風（六〇）
復興……野淵咏（六〇）
俳團……森ほの（六一）
方法……山口草（六一）
爽秋……澁谷平（六一）
考へ……石河天外（六二）
校劇……薫（六二）

▣演劇飛行便……源多德三郎（六四）
▣編輯後記にかへて……（長谷川小信筆）
★表紙（錦繪）……（長谷川小信筆）
カット……山中虹二

秋深く
酒いよいようまし
天下の銘酒
白雪
シラユキ
摂津 伊丹・灘
小西酒造株式會社

歌舞伎座・十月興行

(A)



オール關西大歌舞伎の歌舞伎座は新篇「元祿忠臣藏」の他「十萬堂の秋」その他を上場してゐるが、こゝには忠臣藏の舞臺を特輯した。これは全廿二場の一部である。

A、長三郎の內匠頭、むんずと抱きとめたは箱登羅の梶川與惣兵衛、時は元祿十四年三月十四日、巳の上刻五万三千五百石の運命は此の一瞬にして極つたのである。

B、秋が訪れた。東海道三島の宿で神崎與五郎(壽三郎)は惡馬子丑五郎(延若)に詫狀文を書かされる。

C、吉良をあざむく大石(延若)のてだてとは知らず同志高田群兵術(壽三郎)も犬武士と罵る狀に、同烈の横川(長三郎)もぼうぜん……。

(B)

(C)

D

E

F

(D)　内匠頭が切腹し腹てよりに既一年と八ヶ月　母(蓮女)も芳(吉三郎)も大石の放らつに愛を想かつ
石塚家へと引揚げる。

(E)　待望の日は遂に來た・元禄十五年十二月十四日浪士一同勢揃ひをしてし　吹雪の中を吉良の邸へと
進發するのであつたの。

(F)　本快は遂げられたの。一龍齋盛齋の講釈の山本島三くきを持つ郎五丑の方の馬。陣の郎五與は證詑つ持のもの
知れて丑五郎は主坊はるなに。とかにくの歌舞伎の秋に絢を添へる壓巻!!

十月興行 大歌舞伎 一日初日

毎日三時開幕・初日二日目 二時開幕

どなたが御覧になつても愉快で面白く 最も興味本位で 今までにない新篇忠臣藏

第一篇 新 元祿忠臣藏 五幕廿三場

第一幕
- 一 江戸城中ノ口（刄傷）
- 二 赤穗城内（急報來）
- 三 泉岳寺裏山（梶川の娘）
- 四 假里屋冲（城別れ）

第二幕
- 五 東海道三島宿（訖証文）
- 六 吉良邸お蘭の部屋（血の涙）
- 七 攝州茅野邸（先發隊）
- 八 同 三平の部屋（不忠不義）

第三幕
- 九 本所大清の家（圖面取）
- 十 山城の秋の山（浮大盡）
- 十一 横川村彌作内（鎌腹）

第四幕
- 十二 山城大石閑居（悲憤）
- 十三 同 奥座敷（裏の裏）
- 十四 同 玄關先（別れ）

第五幕
- 十五 神明枕水亭表口（待望の日）
- 十六 同 二階座敷（轉落）
- 十七 堀部安兵衛宅表（雪の進發）
- 十八 枕水亭二階（丑の上刻）
- 十九 吉良邸寢所（討入）
- 廿 同 雪中の亂闘（お蘭の最後）
- 廿一 再び枕水亭の二階（不義士傳）
- 廿二 三島本陣の廣間（義士傳）

第二 十萬堂の秋 一幕

第三 上 保名 下 月・大漁

淸元梅吉社中
淸元喜久太夫
常磐津文賀太夫社中

初日は各等割引値段

初日割引
- 櫻・四十錢
- 菊・六十錢
- 三等・九十錢
- 二等・一円三十錢
- 一等・二円八十錢

中村魁車　中村霞仙　實川八百藏　市川玉太郎　尾上卯之助　實川實三郎　阪東ゆたか　實川延三郎　尾上多賀之丞　中村芳子　實川美鴈　實川延郎　市川市昇　淺尾奥山　市川段猿　阪東壽三郎　實川延若

中林嵐中中中市實實實尾中實市市市
村　　村村村川川川川上村川川川川
梅長吉福　成達延延延多成鴈箱莚市
三三太　　　二之　賀三　登
玉郎郎扇笑雄郎助丸藏郎正羅女藏

大阪歌舞伎座

秋の運動會と御客様の御招待は面白い大歌舞伎へ

電話（戎）二八二六

近畿第一

松茸狩

豐富・良質

山開き

本線　十月八日
高野線　十月十日

南海沿線には至る處に松茸山があります。驛からの距離も近く松茸の豐富なことゝ風味のよいことは近畿第一泉州松茸は毎年大阪府より宮内省に献上してゐます。

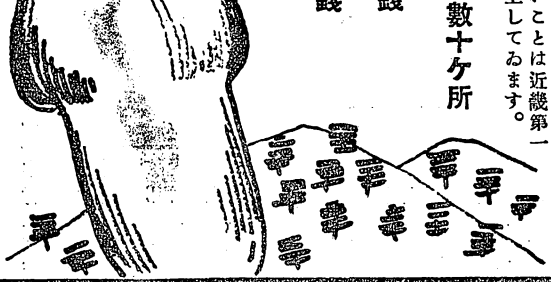
信用ある　南海電車指定山　數十ケ所

松茸めし（喰べ次第）二〇錢

かしわすき定食　九〇錢

かしわ　四十匁
あしらひ　こんにやく
ねぎ、松茸
松茸飯（喰べ次第）
香の物

案内書進呈



南海電車

浪花座・十月興行

てへ加に念記年周五立創、つあも義意の出進回十第堀碩道、てへ加に念記年周五立創
つやと々樂も帳進勸、でれそ。だ行興回一日一は月今、かうは云もでといなか願宿てつとに座一、にれそ。るゐ
判の郎太國にれそ、子調名の樫富の門右翫・さ々堂の慶辨の郎十長。だ演熱くかにと、帳進勸のこがだ。るゐて
官も品あてつ美しいし正に。いきよトリオあでるあ「敢へて—座の眞價を世評ふ間に」。いき大いき大も

中座
浪花座
角座

（右上）
「紙幣」（中座・井上水谷合同）
小坊秀しん（岡田）菊（水谷）
（上）
「彦六大いに笑ふ」（同）
山口の彦一、紅梅のアサ

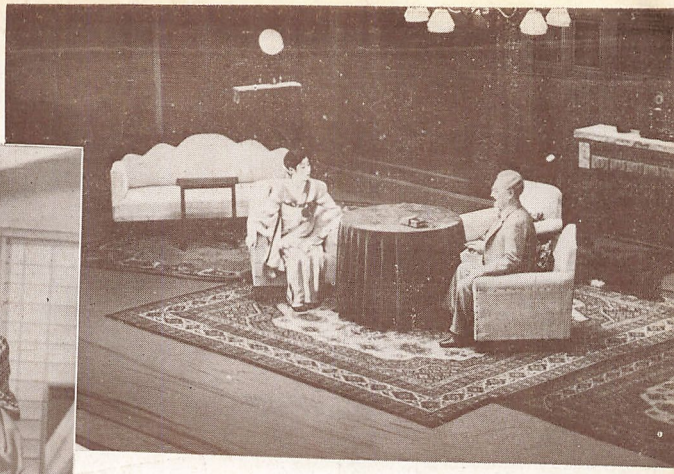
（右下）「嚙みついた娘」（浪花座・前進座）
小三郎の新聞記者
高田榮子の東北娘
山岸の德子夫人

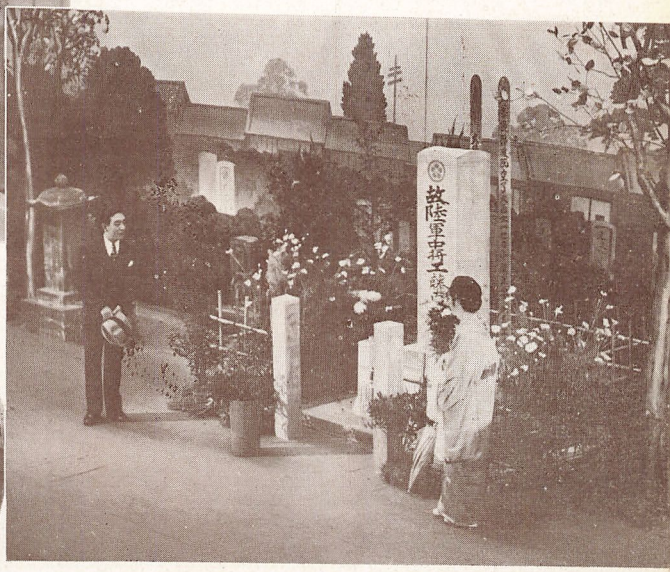
中「彦六大いに笑ふ」（中座）
岡田の妾お辻
井上の彦六

下「夜霧、朝霧」
六條の女將
笈川の秀ど
宮村の松吉
瀧の霞
小久保田のその弟

（角座・關西新派）

上「彦六大いに笑ふ」
竹久のミルミ
清水の田所





右上よりの谷水　父　の上井「道新」

實朱の谷水と　實朱の谷水「道新」

太良の井伊　面臺舞の　「でま朝らか中夜」

【劇同合谷水・上井　座中】

「丁半暦」（角座・關西新派）

夫正　堀——藏賀伊元貸代

郎若波小——吉賀伊　〃

「でま朝らか中夜」上頁右

上井棒泥・久竹給女

（座　中）

木柏屋入口の田村「幣紙」下頁右

（座　中）

「蔓玉念行道」下

菊之亟の園部左衛門・芳三郎の薄雪姫

國太郎のおよし・鶴藏の長作

—浪花座・前進座—

「人斬り伊太郎」上

これこそ前進座が
獨壇場を誇る大殺陣

（浪花座・公演）

「醫者と商人」下

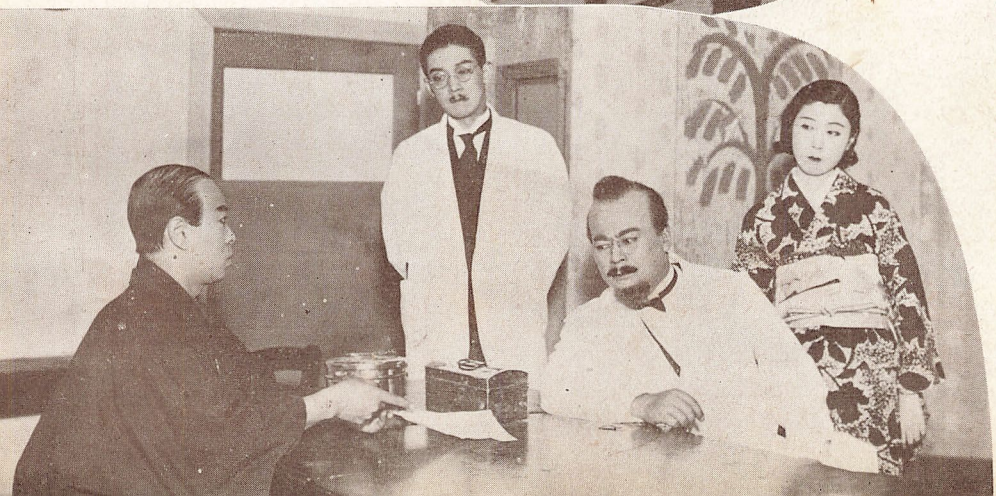
（西關新派・角座）

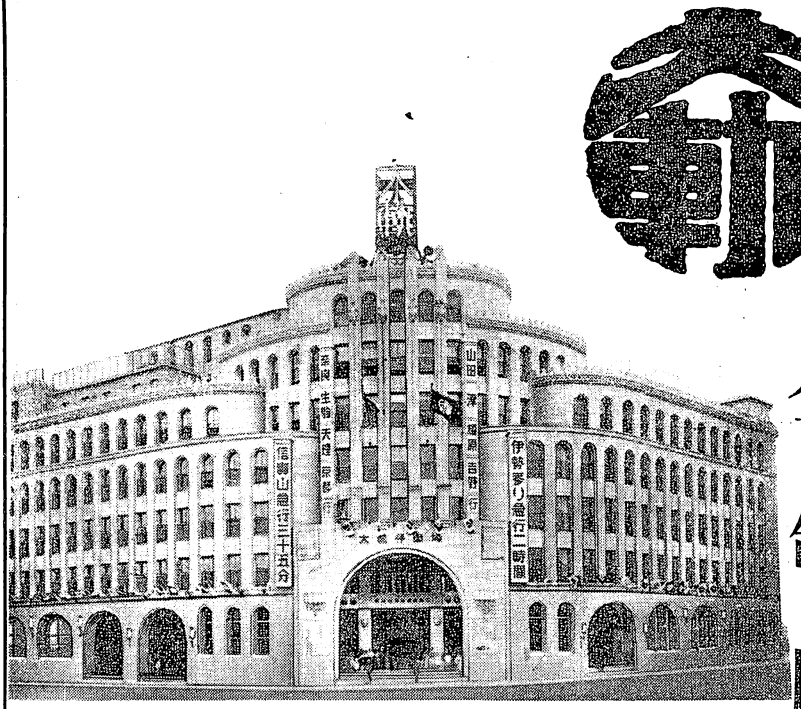
浅田夫人リュウ子
中田金森博士
田寺若い醫者
畑石賓店主

中

角座・關西新派の「嬰兒殺し」

都築の小山巡査
梅の井の女主方あさ





全館開店

自慢の百貨

地階　食料品・果實・花卉類
1階　菓子・煙草・藥品・商品券
2階　雜貨・時計及貴金屬
3階　呉服類・外商部
4階　雜貨・お子達用品
5階　**大食堂**・御家庭用品

營業時間　賣場　午前九時より午後九時迄
食堂　午前十一時より午後十時迄

定休日　毎月八の日（日曜祭日の際は翌日）
食堂は年中無休

無料配達　大阪全市及大軌沿線無料配達
吉野線參急沿線驛留無料配達

大軌百貨店

大阪上六　電話天王寺三一三一・三三三一番

金鶏印罐詰 二大製品

1. 純良精選の牛肉
   で御座います
1. 不意の御來客に
1. 御酒ビールの御友に
1. キャンピングに
1. ハイキングに
1. 各地百貨店
   著名食料品店
   に販賣致して居ります
1. キンケイ印を御指定下さい

洋酒・食料品・罐詰問屋

大阪市東區豐後町三番地

株式會社 横山商店

赤玉少女歌劇秋期特別公演

オペレット・レヴュー

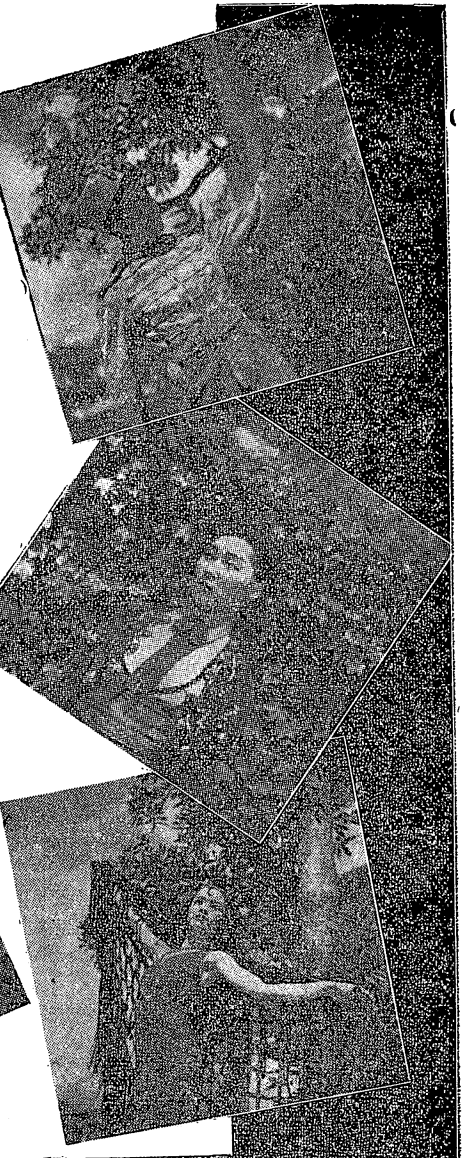
情熱のカルメン

赤玉少女歌劇女生徒合同總出演

赤玉交響管絃樂團伴奏

年一回の大社交祭

メープル・カヴァリア開催中



東洋一國際大社交場

大阪堀頓道

赤玉ーレバヤキ

レートクレーム

若肌のまもり

秋の乾燥した空氣や冷たい風は、お肌を荒らして、シミ、吹出物、小皺を殖しますから乳代の完全なレートクレームでお肌へ適度の潤を與へ柔軟滑澤な青春美に輝く若肌を創りませう。

御愛用感謝・破天荒の大壯擧!!
五百萬名樣總當り大懸賞募集中
詳細は新聞雜誌上で

東京・平尾賛平商店・大阪

「噛みついた如」
（浪花座・前進座）
これはコッタ百面相ですれ

右「夜霧朝霧」
滝・宮村・笈川
（角座・關西新派）

（左）前進座の「勸進帳」舞臺面
（浪花座）

文樂座・十月興行

大阪の人形芝居は世界的に位置を認められてゐるすこと。

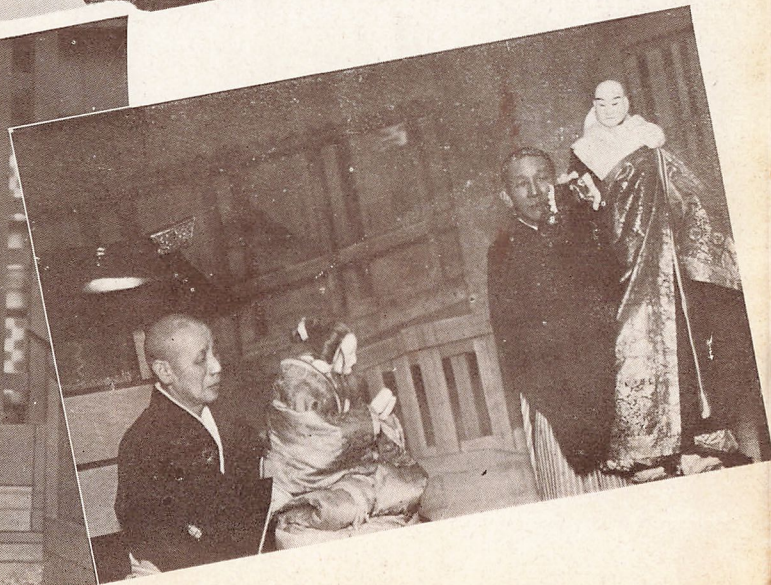
世界の探求をもとし、もてはやされこれ程細巧繊細な緻密に、然かも元始的な味ひがあつて、人形浄瑠璃の術藝は、山澤はのもたらした術藝的に達發の本日を凡そ。

事の發達史に於ける術藝のうちで、最も影響を與へたものは、民國性に培はれて、支那の影響を受けずに、獨自の發達をなしたものである。

我が人形浄瑠璃の茶と趣味とは、はるか遠くの來朝の賞玩に正に秋の季節である……。

「討夜川堀櫻所御」　(右頁上)
「壽季四競花」　(左上)
「島綱天中心」
(場の内屋紙)

「討夜川堀櫻所御」　(右頁下)
「來由の杉辨良」　(左下)
「島綱天中心」
(段の庄河)



九月浪花座で一ヶ月打通し文字通り全勝記錄を樹立した扇雀小太夫菊次郎をはじめ新鋭を揃へた東西合同若手歌舞伎は十月は神戸へ陣を移し、浪花座上演の「宮本武藏」に「色彩間苅豆」それに鳥江銕也氏の新作「堅氣街道」「椀久末松山」「戀小唄扇港一振」の三篇を加へて熱演、絢爛、秋に競ふて斷然活況を呈してゐる。

松竹劇場・十月興行

「堅氣街道」

濱紙屋清吉——扇雀
その女房お春——成太郎
追分の傳次郎——小太夫

松竹キネマ京都超特作オール・トーキー
京都・大船・劇壇の花形を網羅せる未曾有の大キャスト

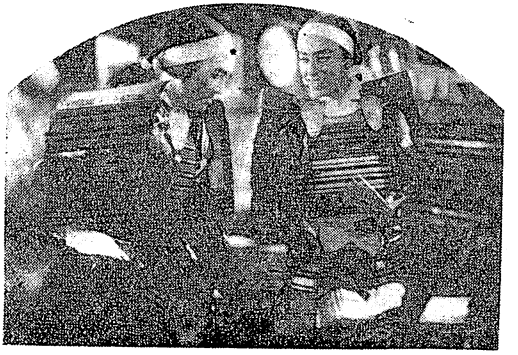
大坂夏の陣

全松竹總動員！ 衣笠貞之助監督

林長二郎　坂東好太郎　高田浩吉　藤野秀夫　山田五十鈴　月形龍之介　薄田研二　阪東壽之助　東山千榮子　上山草人

淺香新八郎　志賀靖郎　柳さく子　小笠原章二郎　林敏夫　結城一朗　芝田新　大山健二　小倉繁　高堂國典　坂東橘之助

光川京子　高松錦之助　永井柳太郎　山路義人　坪井哲　新妻四郎　寺島貢　南光明　阪本武　齋藤達雄　小林十九二
（順序不同）



秋季豪華版封切迫る!!

茶
西区みなとがわ
笠立半
電話阿三六三三五番

花六本店

店主　萩原吉三郎

營業所　大阪市南區千年町二九
電話南㊺二八七三番

工場　大阪市東成區片江腹見町

營業種目

劇場・活動寫眞館・演舞場・各商店內外
各ステージ裝飾・ショーウインド裝飾
カフエー・喫茶店裝飾・園遊會々場裝飾
各徽章・慶弔花輪花束類・各神社用稻寶來

一般宣傳廣告取扱

岡本商事社

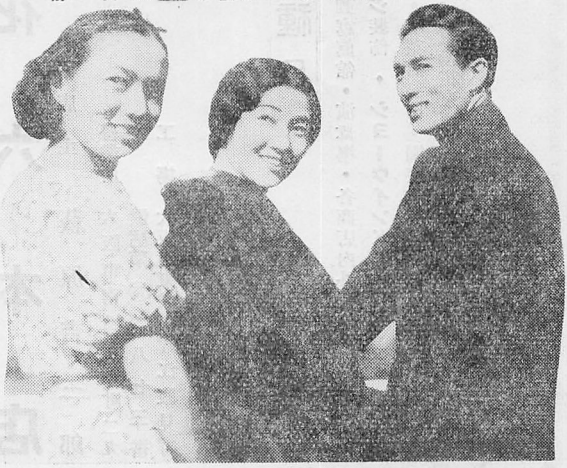
大阪市住吉區住吉町一六五八

新興キネマ創立五周年記念大興行

兄の誕生日

ートーキー

原作　村上徳三郎
監督　牛原虚彦
脚色　村上徳三郎
撮影　藤井静



高田稔主演

眞山くみ子　清水將夫
五條貴子　小宮一晃
園枝幸子　松尾文人
歌川八重子　横尾泥海男
加藤精一

全發聲

風流小唄侍

阪東妻三郎主演

講談倶樂部連載小説
原作　原嚴
脚色監督　沖博文
撮影　上岡喜三郎

梨園の巨頭
中村吉右衛門丈名題門下
中村吉藏
中村吉次
特別出演

東京新派劇團より
筑波雪子
特別出演

月宮乙女
特別出演

新興阪妻谷津撮影所
總動員出演

月刊·演劇研究·雜誌

演類

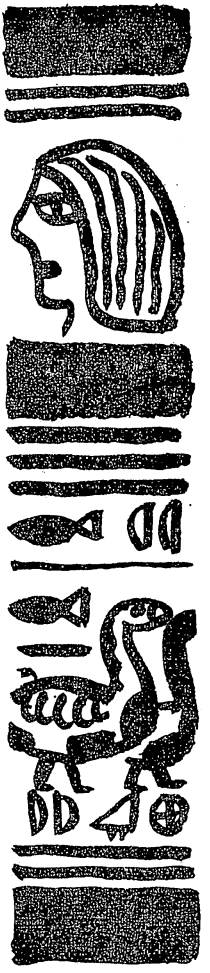
第十一年

十月號

第百二十一輯

創刊十周年
記念特輯號

創刊十周年



特輯號

俳優藝術の創造性

中井駿二

俳優藝術が、文字や音樂等の藝術と異る最も根源的な相違は、人間をもつて人間を表現するといふことであらう。すなはち、文學にあつては文字をもつて、音樂にあつてはリズム化され、旋律化された音によつて「人間」を表現しようとするのに對して、俳優藝術は直接具體的な肉體と肉聲とをもつてその表現手段とするのである。文字及び音響によつて現はされたものは、現はさんとする對象であるところの「人間及びその全般的な生」に對して何等の類似關係を有してゐない。それはあくまで抽的な方法であるのに反して、生ける人間としての俳優はそのまゝに一個の生ける人間を表現しなければならないのである。それは全く抽象化されることの許されない具體的な方法であると云はねばならない。こゝに俳優藝術のあらゆる秘密の鍵鑰が隱されてゐるのである。

こゝに一人の俳優があるとする。彼は自己の肉體と肉聲とでもつて、自己以外の一個の人間に扮する。だが、「この扮する」といふことは抑もどのやうなことを意味するのであらうか。

通常なる概念に從へば、扮するとは先づ表現せんとする人物が、實在の人物として斯くもあつたであらうと思はせることゝ解せられてゐる。例へば、歴史的實在として豊臣秀吉がさながらに舞臺的に實現されることを理想としてゐるらしく考へられるのである。だが果してそのやうなことが理想であらうか。

抽象的な方法による藝術創作の過程は、前に述べた樣に表現せんとする對象と全く類似することのない形式をもつてする故に、その「藝術」の藝術になり方が、明らかに「自然」と區別される。例へば文字は實在と全く似ることのないいはゞその飜譯的な符號であり、旋律や私聲は明らかに實在することのない非自然的なものである。又畫家は繪具をもつて藝術操作のミディアムとする。だが描かれた林檎は、それはあくまで描かれたものであつて實在のものではない。ところが、俳優は人間としてそのまゝに自然の一部に盡してゐる。而も表現せんとするものは同じく自然の一部なる人間なのである。だが藝術とは創造され

たものであらねばならぬ。それならば何處が藝術として「創造」されたものなのであらうか。

肉體をもつて肉體を表現すること、これは一見、繪具をもつて肉體を表現することよりも甚だ容易なことであるらしく見受けられるだが事實はさうではない。一本の樹がそのまゝに自然を表現するやうに、一個の人間がそのまゝに人間を表現するものであるならば、俳優藝術の創造性は何處にも存在の餘地がないものであると云はねばならぬ。果して俳優は創造しない藝術家なのであらうか。

凡庸な藝術家としての俳優の屢々陷る危險がそこにあるのである。卑近な例をとらう。文學者が全く創造的な過程によつて軍人のイメージを文字の上に浮び上らせることに對して、俳優は自己の肉體に更に「自然」の一部である衣裳の援けを藉りて易々と軍人になり得る。而も何んと多くの非藝術的な俳優達がそのやうに易々と軍人になり、官吏になり、實業家になり、著者になり、令嬢になつてゐることであるか。だがそれは單なる眞似に過ぎない。實在への單純な模倣が俳優藝術であると考へるならば世にこれ程安易な藝術は存在しないであらう。だが多くの俳優達がいとも安易に實在への單純な模倣をもつて事としてゐるのが現狀なのである。俳優の創造性が今日、最も痛切に自覺されなければならない。あらゆる藝術が自然への模倣をその藝術的操作の發足の重要な手がゝりとしてゐるのと等しく、俳優藝術も亦そこに出發するものであることは云ふまでもないにしても、それはあくまで出發點なのであつて最後の歸結點なのではない。人眞似の巧であることが俳優として秀れてゐると考へることは人が屢々陷るところの素朴な自然主義的な陷穽である。それは藝術家としての創造的な稟質と何ら關りのない誣しに過ぎない。眞に創造的な藝術家としての俳優は現實の模倣者ではなくて、一の新しい世界の創造者でなければならないのである。それならば眞に創造的な俳優とはどの樣なものを指すのであらうか。

俳優藝術は屢々再現的な藝術であると云はれる。すなはち表現すべき內容は既に戲曲として現はされたものである。俳優はたゞそれを肉聲化し、肉體化すれば足りる。俳優藝術において重要なのはその立體化の方法のみであると考へられてゐるのである。

若しこのやうに考へることが正しいとするならば、俳優は愈々その創造性を失つて、遂にレコードや自働ピアノと同樣の單なる再現の爲の機械と化し了られねばならないであらう或はたゞ立體化の方法にのみ終始する技術的な職人と云はれねばならないであらう。だが俳優は機械でもなければ、また職人であつてもならない。

俳優藝術と重要な關係を持つ戲曲は、事實文學として一應完成されたところの、自己完結的なものであるには違ひない。それはたとへ俳優による立體化の操作が施されなくても舞臺的に實現されなくても、充分に藝術的價値批判の對象たり得るものなのである。しかしそれは文學としての範疇の中においてであつて、演劇として批判されるのではない。よし、舞臺「的」イメージによつて讀みとられるにしても、それはそのまゝでは文學として鑑賞されたのであつて、演劇として鑑賞されたのではないのである。演劇は文學としての戲曲からはみ出したものを持つ、といふよりも寧ろ、文學とは次元を異にする一つの藝術形式であるのである。故に俳優、及びその他の演劇に關與する諸藝術は、單に戲曲の舞臺的再現の爲めの手段であつてはならない。戲曲が演劇に轉位された場合、その文學的自立性自己完結性を棄てゝ、演劇構成の爲の一要素

と叱してしまふのである。そしてそれは極めて重要な要素であるには相違ないにしても、必ずしも演劇にとつて支配的な要素であるとは斷じ難いのである。複雜な構成過程を持つ演劇は常に、戯曲と演劇、俳優と演劇、舞臺裝置と演劇、音樂と演劇等の各要素のそれぞれとの交渉關係につき樣々な解釋を生み、錯綜せる問題をわれわれに提起するのであるが、筆者は演劇における藝術哲學的な諸問題の解明は各構成要素の主導性を一應解消し、いづれがいづれの要素に從ふものでもなく、それぞれの要素間の交渉の仕方は、加法的なものではなく、乘法的なものでなければならないと考へるところに問題解決の核心があると思惟するのである。從つて俳優を再現的なものと理解することによつて、戯曲家に隷屬するものとすることは誤りであると考へられる。俳優は戯曲家の傀儡であつても亦演出家のそれであつてもならないのである。讀者にとつては戯曲はそのまゝで完成された藝術作品であつても、俳優にとつては自己の藝術の出發點を規定する素材であるに過ぎない。

凡庸な俳優執る最も安易な方法は、與へられた戯曲中の人物を最も近く實在の人物に似せて再現することであらう。だがその場合俳優は俳優たることを止めて、戯曲を讀む機械となつたに過ぎぬ。また凡庸な觀客はそれをもつて諒とするかも知れぬが、その場合藝術鑑賞の意義は全く失はれて猿芝居を見るのと何等撰ばぬことゝなるのである。之に反して眞に自己の創造性を自覺する俳優は、素材としての戯曲を通じて、自らの心の中に、一般の卓れたる創造的藝術家と等しく、全きイメージを純粹に內包的なものに還元し、新しいイメージの成熟をまつてそれを表現するのである。この場合、素材としての戯曲を分解し戯曲家が文字によつて抽象することの出來た諸人物に自發的に共感し、その人物の幻像としての自己を顯現し得る能力は、藝術家としての俳優の持つ個性に外ならない。

俳優は常に自己に對して限りなく凉情的で無私的でなければならないと同時に自己の現出する人物に對して最も激情的で共感的でなければならないといふ二律性は、あらゆる藝術の不思議な秘密とされてゐる藝術における主觀客觀の交渉の仕方に觸れる問題である。演ずる自己と演じられ自己との二律性は、それ故に俳優をして藝術家たらしめる所以でなければならぬ。演ぜられる內容が既に戯曲家によつて描かれたゞけのものであるならば、すなはち、もはやぬきさしのならぬ客觀的に存在を規定された存在であるならば、俳優には藝術家としての個性も、更に人間としての個性も不要であらう。またさうであるならば俳優の個性の入り込む餘地もあり得ない。俳優が眞に藝術家であるならば、彼は自己の魂の最も深奥なるものゝ表出を願ふものであるに違ひない。その感動は、その動哭は、その悲嘆又は歡喜は、自己の生の根元的な情況に根ざす自發的なそれであるに相違ない。しかもそれらが自己のものとしてでなく他のものとして表現されるところに俳優の創造的な藝術家としての技倆があるのである。自發的なる感動の無私的精練、そこに一切の藝術の本義が隱されてゐるのである。

このやうに考へるならば、俳優が眞に創造的な藝術家として自己を顯現するためには何よりも人間的な個性の形成が先づなされねばならないと云はねばならぬ。戯曲の人物に對する完き幻像の喚起は、自己の人間としての全存在を擧げてこれに反應することによつてしか得られないからである。そこに創る自己と創られる自己との二つのものゝ發見が可能であらう。かくして得られたイメージの表現法がすなはち演技となるである。

若手俳優と覇氣

鎌谷來水

昔先代左團次の丸橋忠彌の捕物を觀て、その激げしい立廻りに舌を卷いたことがある、現在の延若も屢々上演すれど、モウその殺陣がまどろ臭くて薩ツ張り興味を感じない、それは澤正以來寫實風（專門家に云はせれば、彼麼能率的な劍法は無いといふかも知れないが）の痛烈な立廻りに眼馴れされて來た關係である、それと同樣に故名優の印象をその儘今日に當て嵌めて、今の役者は下手だとは必らずしも云へない。

逃した魚は大きい、殁くなつた人は偉らいと感ずるのは一般の通有性だから、その比較に相當手心してかゝる必要をなしとしないがそれでも中村宗十郎は名人だつたし、先代の霞仙もスツキリとしてゐた、琥珀郎も上手畠の優だつたと思ふ、殊に藝の虫と云はれた璃珏は東京の先代松助以上の巧さを有してゐたと信ずる點今も昔も變りはないが、結局それは當時の役者よりも一歩寫實味に富んでゐたといふことになる。

今から比べると宗十郎の至藝も、左團次の忠彌の殺陣ではないが、ソウトウ粘つたクラシカルな寫實であつたやうな氣がする、然し其處に歌舞伎の歌舞伎らしい風韻と型容美が整つて、その頃の芝居には歌舞伎的な寛ろぎが良く味はへた、いまのやうに映畫や新劇或は新派などの影響を受けて、常人化した演出を常人化したタイプの役者が演るやうになつては、特殊な印象の殘る筈もなければ、舞歌伎劇を見た氣もしない。

市十郎や鴈治郎のやうな浮世繪的の立派な顔の役者が、現代の劇壇にないことが一番に淋しくてならない、扇雀が父親に面差はソツクリでも、顔の輪廓と柄の立派さには及びもつかぬだけに、扇雀も自分のサイズに合した芝居を演らないと損である、本當のご飯をよそつて喰べるまで寫實化した今日の芝居と、綿をご飯のやうに見せて喰ふ眞似をした昔とは、寫實の點に於て餘程の懸隔はあるが。

併し藝の鍛練とか工夫で其役になり

切るといふ點では故名優の印象に鮮やかなものがある、最近感心したのは先代仁左衛門の藝で、沼津の平作や櫻時雨の紹由、或は名工柿右衛門など、柄と年輩だけの素なりで其人物を描き出してゐたが、それよりも旨いなアと思つたのは、白子屋庄兵衛だ、上手の障子をあけて出た瞬間から、如何にも白内障の盲人といふのをまざ〳〵と感じさせた、そこには什いふコツと工夫が要るのか。

寫實もあすこまで徹底すると恐ろしい氣がする、才三に撫つけさせ乍ら長々とした述懐を飽さず聞かせたのは、義太夫で叩き込んだセリフ廻しの巧さからで、是れは鍛練で出來やうが、白内障の實感を出したは名人に近い藝だと思ふ、三世仲藏の玄碩が背後向きになつてゐて、それで似せ盲目であることが見物にも解つて、堀越に舌を巻かせたといふ逸話と好一對である。

その松島家の一門の片岡長太夫は、松島の八千代座で座頭をして老功を以つて知られてゐた、晩年不遇で少しボケてゐたやうだが、却々健者な役者だつた、これが角座で師匠張の柿右衛門を演つた時、その楽屋での彼の述懐が面白い、什うしたら師匠の柿右衛門に似るかと苦心しましたが、柿を見上げた途端大松島家ソツクリと懸聲を聞いて、すつかり安心しました……」と、諧らしげに語つたから阿呆臭くなつた名工の柿右衛門にならず、仁左のイミテーションで行つてそれで滿足してゐる樣では、獨創的のない役者だなアと些か侮蔑の氣持が起つた。

それも七世團十郎と梅壽菊五郎が芝翫の熊谷を觀て、師匠の梅玉を眞似るに汲々とするだけで、熊谷になり切れなかつたを、笑つたと云ふ昔話を思ひ出させたものだ、子は親に弟子は師匠の眞似は避け難いが、その親なり師匠が一世の名優であればある程、御曹子やその弟子が意識的或は無意識的に受ける影響が甚だしい、扇雀などは殊にその惱みが強いやうだ、ある點まで親に似ぬ鬼子の場合の方が融通がつく。

鴈治郎のうまさは、立派な容姿を働かした點と、緊張したその熱演にあるだけでなく、寧ろあの難聲を生かすため、其セリフ廻しを糸に外し散文的に巧く消化して、そこに別趣の味を見せる點を買ふべきであつた、梅幸は茨木以外あまり感服しなかつたが、晩年急に圓熟して顔見世で見た「時雨の炬燵」のおさんの、仕勝手の悪い上方の女房役を、型少なのうちに良く情味を滲ませたのに感嘆した、愈よ梅幸の藝も完成されたと思ふと間もなく起てなくなつて了つた。

故團十郎、菊五郎、左團次、團藏は惜しみ盡くされてゐるので一論にも及ばないし、上方でも先代延若の世話味

や大璃寛の穏健味、下つては先代壽三郎の立役や近くは雀右衛門の女形の柔艶さの再吟味は預りとして、名優級でないかも知れないが最近まで生きてゐたのは實悪の荒五郎の端敵の大吉、その中間を行く卯三郎をこゝへ引張り出し度い、荒五郎は鍛がゝつた眼とあのゼリゼリ聲、いかにも典型的な歌舞伎の實悪に出來てゐた。

尤も國を狙ふやうな大奸といつた氣魄はないが、師直などをさせれば正に絶品、意地悪の慾張りで好色な老爺らしかつた、中車ではチト頑丈過ぎるこの役も、三河家の場合歌舞的な誇張を持つた完璧の師直だつた、それが又神妙な鮓屋の彌左衛門を消化してゐたので意外に思つたが、什處か身體の威がつさが反つて元は武士らしい感じに役立つてゐた、宮守酒の新洞なども適役だつた。

淺尾大吉は重寶な役者で、義平次など他に求められない泥臭さと突張りがあり、宅悦のあの車輪な舞臺にも好意が持てる、「望の港」の宿屋の老主人が醉客をあやなす表情なども未だに眼に殘り、惜しいワキ役者を失つた氣がする、卯三郎は「東下り」の丑五郎、「鎌腹」の彌作、「佐野鹿」の大館なども擧げられるが、それよりも「油地獄」の與兵衛の父親の寫實な巧さが、璃珏の母親と共に是亦眼底に殘る、あれから思ふと現在の二番目狂言の演出はさう進化してゐないやうな氣がする位だ。

最後に逸しられないのは天才故澤田正二郎の出現だ、これが歌舞伎に働きかけた影響は非常に大きい、今ときめいてゐる長谷川伸ものも「掏摸の家」の成功から世に出たもので、澤正が上演せずば、六代目の傑作である「一本刀土俵入」も「暗闇の丑松」も出されなかつたかも知れない、第二の綺堂とし

長十郎の辨慶

勸進帳の生命

河原崎長十郎

勸進帳は歌舞伎劇である。

これが私の感じる大きな問題である。

「あそこの所は能ではこうしてゐる……。能ではあゝは演らないから直した方がいゝ」

こうした注意をよく聞く。又好意を持つての注意を頭から否定すると云ふ樣な、不謙遜な考へを持つ者ではないが、廣般な觀客諸兄姉も、亦一般俳優當事者も、勸進帳におけるこの

て伸ものが歌舞伎に巾を利かせてゐるのは、澤田のお蔭とも云へないことはなからう。

それにモ一つは劍劇の流行だ、一人の天才出れば一世記潤ふと云ふ譬へがある、その祖述した劍劇藝術は、その後幾多の劇團を培養して、いま尙大衆に支持されてゐるから偉らいものであるが、こゝで特に稱へたいのは澤田の國定忠次ではなく、無論桃中軒雲右衛門でもない、彼の唯一の舞踊劇でセンセーションを起した「金平化生討」に於ける天禀的素質だ、素養のない者が急に舞踊の稽古を初めたつて、さう旨く演れるものでなく、幹部級總出の化物など、體操式の振附であるのに不揃ひで困つたもの。

無論澤田も幾ら器用でも滿足に踊れる筈がなく、それに長い金平の物語がある、チョボに乘つて什う仕消化すかと心配したのに、碌に稽古もしないで初日を出すと、三味線の間をチャンと心得、熱と力でキビ〳〵と踊り拔いた意外出來榮に吃驚した、全く棟梁になるだけ什處か優れた素質の持主であることを其時しみ〴〵と感じたものだ。

だが彼麼エライ俳優はさうヒョイヒョイと現はれないが、若し現在の歌舞伎の新人たちの裡からでも、第二の澤正みたいな革命兒が飛出し、腐りかゝつた象牙の塔を破壞して歌舞伎の型をかへ、現代の大衆に適應する藝術の天才があれば、またあと一世紀潤ふに違ひない、歌舞伎は何も時代遲れの故名優の型や、古脚本の研究が主眼とも思はれない、大體今の若手はちとイージー・ゴーイング過ぎて、勇敢な覇氣のないのが何よりも齒痒くてならない。

道頓堀

御購讀料——

一年（十二冊）一圓二十錢

御申込みは編輯部へ

「能」と「歌舞伎」との問題を無批判的にすてゝおく事から本來の勸進帳の生命とも云ふべき中心が失はれ、現に相當この問題を泥問した演出が常識的に行はれてゐると云ふ事を感じるから少しこの研究に入つて見る事にしたいと思ふ。

勸進帳の今日に至る發展ですが元祿十五年年江戸堺町中村勸三郎座で初代市川段十郎（後に團十郎と改む）が辨慶を勸めたのが最初である。此時の名題は「握荒齡泉寬闊武藏星谷十二段」狂言作者三升屋兵庫（是は團十郎の作名）この時は古今の大當りで百五十日も打ち續けたとある。

それから七十年程經た、安永二年十一月、中村座に於て市川海老藏（四代目團十郎）が「御攝勸進帳」と云ふ名題で勸めた。これは一名芋洗の辨慶と云ふ初代櫻田治助の作にて續き狂言の內「五立目安宅の關」の場があり、その一節を次にあげてみると。

辨慶、雜兵に縛られ

山伏はモウどのくらひ行つたであらうと聞く。雜兵まだあまり行かぬと云ふ件あつて、又聞き出し、

次代の人々

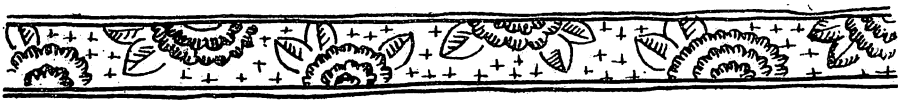
藤堂行

若い人達には芝居をさせなければ上手になれないのは勿論です、いつも端役ばかりやらして置いたのではいけない、と云つて重要な役を振り當てることも出來ないでせう。だから斯んな人達、いはゆる花形とか若手といふ人々ばかりの芝居を組立てゝ演らせるといふのは誠にいゝ事です。

しかしこれには確かりした指導者なり統卒者が必要だと思ひます。若い人達がめい〳〵勝手な芝居をするのを怖れます、それは若い人達が研究もし、工夫もするだらうが、歌舞伎道にはまた自づからいろ〳〵の約束があるそれを無視して新らしがつたりするだけではならないと思ひます、そこに統制された芝居が出來上らなくてはならないと思ひます。一人々々に見て居れば、あの俳優はよくしてゐるといふ場合も、芝居は一人がよかつたらよいといふものではない。そこに多勢の者の力が渾然と融合されて一つになつた舞臺を見出さなくてはならない。すなはち統制がむつかしいのであると思ひます。

これは舞臺監督や演出者のみの力では可けない。ヤハリ俳優中にこの統卒者がゐなくてはならない。この意味で曾我廼家五郎劇などが旨く統制されてゐるのは五郎といふ統卒者があるからだらうと思ひます、若手の芝居はこれが甚だむつかしいのではないでせうか、その邊興行者も注意をして貰ひたいと思ひます。

芝居が興行である以上、經濟上の條件が伴ひます、これを無視することは出來ないのは無論です、そこで藝よりも人氣などゝいふやうな事も考慮に入れるでせう、九月の浪花座の花形歌舞伎ですが、私は、扇雀が大將であるのを惡いとは申しません、いつも若手といふと扇雀が大將といふところです、東京へ行



辨慶　最幾千程今の山伏は行つたであらう

雜兵　大方三里も行つたであらう

辨慶　そんならもうよい加減だわえ

雜兵　よい加減とは何の事だ

辨慶　よい加減とは、跡から行く事だ

雜兵　そんなら、わりやあ

辨慶　武藏坊辨慶だ

雜兵　イヤア……

辨慶　我君を落し參らせ、跡おひかくるが忠義の一つ、其處おつぴらいて通すまいか

雜兵　辨慶と答へちやア通されぬソレやるな〳〵ドツコイ

是より太鼓入りの相方になり海老藏、氣味のよき立まはりトゞ殘らず首をぬきて天水桶へ打ち込む雜兵手傳ひ首を運ぶ、トゞ其雜兵の首を拔き、チヨント思入れ、以前の山伏五人立戻、海老藏を見

山伏　出來た〳〵

辨慶　やかましい

と金剛杖を二本取つて首を芋のやうに洗ふ、片シヤギリにて幕

つても可なりやつて居ります。

しかし扇雀といふ人は一本立が出來るからと云つて、いつもあれは大將にすることは扇雀自身の爲めにも採りません、あの人はモツと大家連の中に入つて揉まれて來るべきです徒らに大家がらせては可けません、まだあの人の藝は生半可です、技巧のみは親父の影を追ふてゐますが、失禮だが、內面的にはまだ〳〵研きが足らない、いはゆる腹が出來てゐないのを惜しく思ひます、いつも大將にして置くとあのまゝ固まつてしまひさうです、本人がこれで足れりとしてはゐますまいが、まだ一人歩きは駄目です、よろしくよき指導者が必要であると思ひます、扇雀個人のことになりまして恐縮です、お訊ねの先人のはなしは私は知りません、先輩の苦心談などは俳優諸氏の方がよく御承知だらうと思ひます。

私は必らずしも左樣には思ひませんが、歌舞伎道衰退の聲を聞く折から、是が非でも次ぎの時代の花形諸氏の健闘に待たればならぬのであります、頑張つてください、お願ひです〳〵。

近時雜感

菱田正男

九月の大阪歌舞伎座では、新國劇が澤田正二郎の追善興行をやるさうですし、大阪浪花座では扇雀、小太夫、菊次郎、成太郎らの若手連の旗擧興行が開くさうですが、秋の觀劇シーズンのトップを切るにふさはしく大へん面白いことだと思ひます。

新國劇の澤田が歿くなつてからもう七年ださうですが、今なほこの人の死が惜しまれてなりません、この人を今と云ふやうな大時代なものであつたらしい。

その後五十年程經た天保年間、七代目團十郎（八代目九代目團十郎の父海老藏）が能樂によつて一幕物を作らうと密に謠曲界の人々に懇意を求めて安宅の仕舞を見、又講演師の南窓、鼎淺の辨慶勸進帳の講談を聞き研究を重ね三世並木五瓶に脚色させて、自分も之に再三改訂を加へて臺本を作つた。作曲は當時有名であつた、杵屋六三郎（後に六翁）に節附をたのむと、一世一代の名曲にと思ひ立ち丹誠をこらし、今日まで傳はる古今の名曲が出來上つたのである。又振附は、やはり當時の名手、四代目西川扇藏にたのみ扇藏は安宅の能を參考に、歌舞伎の形式を失はず、幕外六法の引込まで、少しの隙もなく作り上げた。扇藏一世の譽れである。

當時七代目團十郎は職人に身をやつして觀世の舞臺に近づいて盜み見て研究したと云ふ。かく名人が苦心を重れた結果、天保十一年子年、木挽町、河原崎座の三月興行に上演江戸中の評判になり大當りした。これが今日に傳は

なほ生かしてゐたら、どんないゝ芝居を見せてくれることか、依然として俳優で押し通してゐるか、或ひは偉大な演出家となつて劇壇をリードしてゐるか――今そんなことを考へただけでもあの元氣一ぱいの故人が目の前に浮んで來ますね、偉大な人を喪つても新國劇は立派に育つてゐるのは喜こぶべきことです、俵藤氏や、久松氏の並大抵ぢやない苦勞もよく判る氣がします、それにしても辰巳、島田の若き後繼者がよく頑張つてくれてゐるのは嬉しいことです、そのむかしのデコ助やカボチャの今日の精進を地下で見る澤田の喜こびを察しると新國劇ファンは必らず感激の涙にくれませう、死ぬまで舞臺を忘れなかつた故人の立派さは今の若い後繼者は大いに學ぶべきです、そして亡師を凌ぐいゝ俳優になつてほしいものです、師を亡つてこゝに七年を迎へた新國劇も峠の中ほどまで頑張つて來たわけです、これからもいろ〳〵な難關に立會ひもしませうし、又出合ふことによつて益々錬磨されてゆくのですから、ウンと全力をあげて登り切ることです、追善興行に故人の案の「殺陣」が出るさうですが、最初大阪浪花座でこれを見た時、たしか鳥居君だつたか、鬼頭君だつたかがやつたやうに憶へてゐますが、憶かしいものが見られるので大喜こびです、皆一つになつてこれまでやつて來たのですから、これからは容易にくづれやうとは思へませんが、萬一のことのないやうに更に堅い結束が望ましいです。それから九月、浪花座での青年歌舞伎の方ですが、扇雀、成太郎兩君にしても東京での修業でウンと腕も磨けたことでせうし、願はくばもつと東京での勉強が出來ればいゝのですが、これもいろんな事情で不可能かも知れません、歸つてくれば元々こちらの人だし、よいことつた勸進帳である。

七代目團十郎（海老藏）は非常にこの成功を喜んで、特に六三郎、扇藏兩氏のために感謝の意を表したさうである

天保十三年この海老藏奢侈に長じた爲江戸おかまいとなつて上方へ追れたその留守中孝行者であつた、その子八代目團十郎が父に會ふため上方へ旅立つそのお名殘狂言として嘉永二年三月河原崎座で初役辨慶を勤め上阪した。この孝心のため海老藏は赦免になつて江戸へ歸る事が出來、嘉永五年九月、河原崎座で、元祖團十郎の百五十年、二代目團十郎の百年、及び自分の一世一代として勸進帳を出し、此の時、剃髮して、地あたまで勤め此興行も大入の盛況であつた。

その後例の九代目團十郎が、安政六年七月江戸猿若町市村座で（當時河原崎權十郎を名乘り廿二歳）初役で辨慶を勤めて以來、明治三十三年の四月歌舞伎座まで、十回上演してゐる。

九代目沒後は、御承知の通り比較的多くの俳優によつて演ぜられて來た。

◎

この歴史をみても解る通り勸進帳は

はよいにきまつてゐますからこの上の精進を望みます、延若、梅玉、魁車、壽三郎らの巨頭連と伍して、否次ぎの關西劇壇の首將としての奮鬪を心から願つて止みません、小太夫君にしても新興座以來、關西で馴染の深い人だし菊次郎君も竹三郎時代から六代目と一緒に關西で將來のある舞臺を幾度も見せてゐる人ですから土地ッ子の俳優連と同じ歡迎は受けられることゝ思ひます、ですが、若い人の藝はとかく先人の名優連と比較されて貶され易い、こんな常識的なことでも氣にすれば際限のない話で、若い人々はたとへ四面楚歌の裡に立たされる場合でも自己の藝の錬磨以外何ものもなしのイキで精進すべきです、ヘンに幇間的なお世辭を云つたり、妙に感情的に對立したりなんかせずに、どこまでも眞面目に舞臺精進を心がけてほしいです、今日は昔の俳優衆のやうに超然主義を執つて濟ましてゐられる時代ではありませんから、つき合ひも廣くなり、いろんな點で顏を出す機會も多いわけですが、よく役者の本質を忘れたかの振舞ひをする人がありますが、あれなぞよく考へて愼しんでほしいと思ひます。それから小太夫君や菊次郎君は東京の人だから別に申しませんが、扇雀、成太郎君をはじめ、純粹の關西の若手俳優は、東京の若手連と比べると、隨分見劣りするやうに云はれてゐますが、これなぞの原因はいろ〳〵ありませうが、つまり、勉强心が足りないといふ結論になるのでせうが、これは一面理窟がないわけのものでなく、東京の若手連は劇場に、指導者に又いろんな點で惠まれてゐますが、關西方はどうも頭を抑へられて、一寸手も足も出ない形にあるやうです、ですから勉强をしたくとも出來ないのぢやないかとわれ〳〵も同情してゐることもあります、けれど

たしかに能樂から歌舞伎へ移植されたものである。現代的に云へば能と講談を元に、七代目團十郎が企畫構成して並木五瓶が、シナリオ化し、音樂、杵屋六三郎、舞踊、西川扇藏、監督、主演團十郎と云ふ陣容である。

私しは勿論九代目の演出は見る事が出來なかつた。それ以後の演出では、先代段四郎氏のが一番よかつたと今でも新鮮な印象が殘つてゐる。

それ以後のものは比較的、能の影響を無比判的に受けて、あつかひ方が能樂的なかたむきが多くなり、歌舞伎芝居の持つ即ちドラマとしての、演出上の構成がぼやけて來てゐるやうに考へられる。

例へば科白があまり能がゝると劇の持つ對話的な組合せがなくなり、或は歌舞伎の持つ芝居としてのドギツさがなめらかな、唄になつてしまふ。そうすると科白の內容から來るニュイアンスも消失してしまふ。又日本舞踊の劇的要素（色々氣分によつての思入など重要に考へられてゐる）も、無表情な能樂的特有なものになつて、この芝居に必要な、所謂演劇上の現實感が只形

も、それだからといつてノンビリ構へられてゐては困ります、こんどの結成を期にウンと勉強し、そして小太夫君や菊次郎君などの東京人が加はらなくとも、關西の若手だけで立派に常打出來るやうな機會をつくつてほしいものです、東京と大阪などと今日の狀勢から考へて區別するのは可笑しいですがやはり競爭對手のあることはいゝ刺戟になりますから、相對立させて勉强させたいものです、今まで云つたやうな意味で、九月のこの兩座の成績に大いに期待と興味をかけてゐます。

中村扇雀に期待する

堂本寒星

〝中村鴈治郎の死〟といふ、一つの大きな衝動を一轉機として、關西劇壇が徐々に更新されつゝあるなかに、所謂〝歌舞伎若人〟の擡頭が著しくなつて來たことは、誠に歡ばしい現象である實川延若、中村梅玉、中村魁車等の既成俳優に就いては、暫らく言はず、〝歌舞伎若人〟とは、將來の關西劇壇を脊負つて起つ中堅俳優を指すのであるから、先づこれらの一群を蹶起せしめ、就中中堅の異彩中村扇雀を拔擢し彼を中心として新涼九月の浪花座で、新しい劇團が結成され、沈滯し切つた關西劇壇の寂寥を破つたことは、大い式的な運動美となつて劇のテーマから遊離し過ぎてしまふ。この芝居は能はあくまで參考材料でやはり、歌舞伎的演出が基本となり、一貫したテーマの進行の中に劇的クライマックスを明確に浮び出させ、長唄につれた日本舞踊對象に向つての對話的科白の歌舞伎的なニュイアンス、腹藝、思入れ、心理描寫、パントマイム、等々が能樂的要素の取り入れを調和よくほどこして行く所に、この芝居の生命があるのだと考へるのである。

◎

私は昭和八年の十一月新橋演舞場で初めて辨慶を勤めて今度が二回目の上演である。九代目團十郎程の名優でも勸進帳上演の前には十五日間位家で稽古をしたとか、高弟の新十郎氏の話を傳へ聞くし「始終息のつげない大役だ」と團十郎自身告白して居たさうである

全く、（いきを拔いて樂にやれば別の話だが）出たら一つも息のつき所のない、時には目玉もいきみ出てしまふかと思ふ樣な苦しい底力のいるこれ程の大役はないと思ふのである。今度の大阪での再演は出來るだけ傳はつた型

に意義があると思ふ。

扇雀は名優中村鴈治郎の遺子としてその兄妹のなかで、最もよく鴈治郎の血を傳え、多角的で絢爛な藝風の持主であり、上方俳優としてのあらゆる條件を具有してゐる〃歌舞伎若人〃中の多彩的人物である。

そして、今や舞臺藝術の煥發期に入り、英氣潑溂、未來の榮冠を目指して躍進の途上にあり、中堅の人材に乏しい關西劇壇に在つて、よく東京劇壇の中堅俳優と對峙して、些の遜色を見せないことは、最近の東西花形歌舞伎の成果に見て、大衆の等しく認める處である。

だから、今次結成された扇雀中心のこの新劇團こそは、近き將來の關西劇壇を左右すべき使命を有するものであり、この新劇團の發展消長についての重責は、一に扇雀の双肩にかゝつてゐるのであるから、扇雀はこの機會に全幅の努力を拂つて、劇團と生死を俱にする覺悟がなくてはならない。それがやがて扇雀の生死をも支配するであらうことは言ふ迄もないのである。

かうして、過去に於て暫らく隱忍自重してゐた扇雀にも、漸やく春がめぐつて、今や彼の自由に活躍すべき秋が來たのであるが、同時に扇雀は更に今後の進むべき途に對しても、愼重に考慮を拂ふ時期に到達してゐると思ふ。

このことに就いては、既に從來種々に論議され、扇雀も相當の腹案を持つてゐるやうであるが、私は扇雀の新しい首途に、何よりも今後の扇雀を偉大ならしめんが爲めに、〃鴈治郎模倣の排擊〃と、〃新歌舞伎の研究〃とを提唱したい。

扇雀の鴈治郎模倣は、扇雀自身も言つてゐるやうに、鴈治郎の子として、その血を享けてゐる以上、當然似るのには相違ないが、時代にそぐはない型を再研究してより正しい歌舞伎的演演出に盛り上げたいと思つてゐる次第である。

プツシゴ

關西新派の六條奈美子が岡田嘉子を中座の樂屋に訪づれると部屋つきの新米弟子が竹内京子に「京子さアん、お姉樣がおみえですよ」と云ふ、京子喜こんで部屋に這入れば岡田嘉子それと察して今更のやうに六條の顏を眺め「まア〳〵」と讃嘆。「いやよ岡田さん」「でも全くよく似てるワね、」おかげで京ちやんだけがガツカリ……

の踏襲に、若き扇雀が時に破綻を見せることを憂ふのであつて、扇雀も少年時代は兎に角、今日ではもう父を失つて獨立した以上、鴈治郎そのまゝの模倣を、いつまでも繰返さないで紙治にしろ、梅忠にしろ、乃至「引窓」でも「近八」でも、鴈治郎をテストとして扇雀獨自のものを創造しなくてはならないと思ふ、

また、新歌舞伎は、獨り扇雀のみならず、新時代に生きる〃歌舞伎若人〃の等しく研究すべき重要性をもつものであるが、これは新人の作物に俟たなければならないので、發見や選擇に困難が伴ふのは當然であるから、扇雀の藝風をよく理解した新しい作家の出現を俟つて、この方向に進出し、扇雀獨自の舞臺を展開させたいのである。

扇雀が新作に理解があり、これを消化し創造する力と熱を抱藏してゐることは、既に大正八九年の頃、扇雀が京都で始めて青年歌舞伎を結成した時から認められてゐるのである。

その時代の扇雀は、未だ若年だつたので、舞臺も若く、山下秀、坪井正直君など、その頃の若き作家だつた人々の「四つの袖」「若き歌麿」「惡源太」「辻斬」を連續的に上演したのであるが、「辻斬」の如きは菊池寛氏も絶讃した位だつた。

だから、扇雀が今日再び新時代に適切な新作の世界に乘出したならば、彼は必ず獨自の境地を開拓し得るであらうことを私は確信する。

かくして中村扇雀は、關西劇壇の覇權を掌握し、近き將來の關西劇壇は、扇雀の天下となるのではないか。扇雀の死を賭した、最後のゴールへの奮迅。それを私は大に期待する。

結核にはオキソウ
淋病にはコイン
…花柳病科…
藤原医院
★番六三六〇二六戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★
淋病にはコイン
結核にはオキソウ

前進座 肉弾宣傳時代

小三郎 橘

苦しいのか判らなくなる……さう言ふ苦しさがある

五年前の八月新橋演舞場第一回公演の戸別訪問宣傳……此の時なぞもそれだつた市村座を燒け出されてからやつとの思ひで、本當にやつとの思ひで大劇場への進出……周圍に歌舞伎東劇等一流大劇場を控へての苦戰で皆張り切つて居た、全身から流れる汗に肩から掛けた赤い宣傳たすきの色が落ちて折目のない洋服に浸み込むで居る、下谷數奇屋町湯島同明町方面を正午までに廻つて今度は五反田へ!!物凄い肉彈宣傳だ！　夜は芝居がある相當の勞働であり乍ら皆ニコ〳〵して居た例へ一人でも多くの觀客をと、夢中で歩く一軒々々演舞場初出演口上と狂言を一々陳べて歩く、口の中は次第にスパ〳〵になる、舌はもつれる、僕はたまらなくなつて自動車のガレージへ飛び込むだ水を一杯呑まして貰ひに處がガレージの入口に水槽タンクみたいな物があつて蛇口の栓がついて居た長いホースがトグロをまいて居る其の先を僕は慌てゝ口へ突込むだ翫右衛門氏が栓を捻つて呉れる、ガブ〳〵と呑むだと思つたら此の家の御内儀さんが奥から飛び出して來て『モシ〳〵それは川の水ですよ、自動車の泥を洗ふんです』僕はトタンに目を白黑した、翫右衛門氏が泣き度い樣な顏で、だまつて仁丹を出した、僕は無暗にガリ〳〵と嚙んだ、そして二人共無言でそこを出て又夢中に戸別をやり出した、『小三ちやん何んともない？』暫くして、翫右衛門氏が聞いた、『ウムーン何んの共……』二人はハハ……と笑つた汗が目にしみた。五年前の宣傳と、五周年を迎へた今日の時間的に肉體的にも合理的に整理された宣傳方法と、……此の一事のみを考へてもそこに集團としての大きな力と限り無い喜びを感じるのである。懐しい、苦しい、樂しい宣傳時代、未だ〳〵色々な形で僕達の上に打突つて來い。（一九三六・九・二〇）

ンヨシクセ・リボントウド

女形

富田英三

先月號の道頓堀で食滿南北さんが『女優』だと云ふふれこみで『女形』を一人コツソリこしらへておけ……と暗に女形らしい女形のすくなくなつたことを南北流に嘆いて見えるが、その尻から『變態』と擔らふぢやない……と斷つてみえる、女形にしてもこの『變態』と云ふ言葉さへなければ『ボク』とか『オレ』なぞと云ひたくない筈だ。

ミス福岡賞インターヴュー

千塚崇

（繪・文）

九月は全く伊勢音頭月でありました東では我當さん、西では扇雀さん、そして大劇でも林長二郎さん指導、青春座、歌舞伎レヴュウ伊勢音頭といふ事になつたのであります。そこで、今月はこのレヴュウ島に前代未聞のミス福岡賞、花田須磨子さんとのインターヴュを載せる事に致しましよう。

今月は青春座の花田さんの相手役若草リラ子さんが病氣休演である。そこで先づお二人のオネツの診斷から始めてみる『奥様お休みで淋しおまつしやろ』『エ、とても』チエツ、奥様といふだけでピーンと若草リラ子孃を感覺するんだから全くあてられてるみたいである『こうはつきりと當てられては私だからいゝ様なものゝこれが夏だつたらたまりませんネ。ついでにおうかゞひしますが、リラ子女史と貴女との御關係はいつからです』『リラ子さんとは青春座創立以來です。それまでは、私は大濱の少女歌劇に居りましたよつて』花田さんは知る人ぞ知る大濱少女歌劇團のピカ一スターであつたのです『大濱から青春座へ入つた動機は』『風水害で大濱歌劇が解散になつて、そいで、こつちへ入る事になりましてん』『そうすると風が取りもつ緣かいナといふ事になりますネ』『大濱では專ら男役だつたんですか』『エ、』『前の勸進帳といひ今度の伊勢音頭といひ、花田さんは歌舞伎ものがお上手の様だけど、歌舞伎ファンですか』『エ、歌舞伎ファンです』『誰がごひいき』『鴈治郎さんです』『鴈治郎さん亡き跡は誰、扇雀さんですか』『矢つ張り鴈治郎さんですネ』なか〳〵ファンの貞操が固いです『浪花座に見學にゆきましたか』『行きましたけど、見れば見る程、心配で見ない方が樂に演れるので見ない様にしてます』『歌舞伎ものと現代ものとどちらが演りたいですか』『ダンスなどしたいですが、矢つ張り歌舞伎の方がピツタリ來る様に思ひます。大體、青春座が演劇に重點を置いてますから、でも今度はOSSKのふるさとの唄に應援出演するので何だか若返る様な氣がします。青春座はどうしてもお芝居がゝるのでファンもOS

SKよりは少し年齢が上になるし、皆オールドミスの樣に見へて損ですワ』

『實際のとこ舞臺を見てると相當の年に見へるんだが、今こうやつて素顏を見てこんな娘さんだつたのかと驚いてますよ』これはお世辭ではありません『ファンはどんな人が多いですか』『青春座の方は少女といふより藝者さんだとかが多い樣です』『貴女の趣味はどうなんです』『どつちかといふと日本趣味ですね、でも辨慶だとか貢をやるんですもの』『成程それもそうですねまさか福岡貢がタツプもやれないしぢや外國映畫などどう』『それはやつぱり見ます、クラークゲーブルが好き』『ちよつと待つて下さい、クラークゲーブルですネ、そうはつきり言はれちゃ悲しいですよ、當時OSSKといひ皆樣クラークゲーブル黨絶對多數なんですネ、全くこうなるとボク、ヒゲのないのが淋しいです』『喰べものは何がお好きゲーブル飴などありませんよ鴈治郎飴はあるけど』『甘いものが好きですネ』『鴈治郎飴をプレゼントする事にしましよう、舞臺を見てるとお酒などちよいといける姐さんの樣だけど別に甘いものなんて遠慮しなくともよろしいよ』『無茶いひなはんナ、お酒なんかよう飲みまへんデ』全くそうらしいです、花田さんの素といふものは舞臺の時とは全然反對に實に餘りにも柔順しすぎる娘さんであります。ボク、大いに從來の認識不足を改める覺悟です。

鏡の前にはファン贈る處のおまんぢゆうの箱がある『あの、萬よべ萬よべつて處ネ』おまんぢゆう御馳走して呉れないかなと思つて一寸けんせいしてみる、『エ、あすこむつかしおまつせ』『あの、饅よべ饅よべね』『むつかしいです』『さうお芝居に熱心ぢや困りますねそこにあるお饅頭よべつて言つてるんですよ』『あゝさよか、あんたはからいものが好きやと思つて遠慮してましてん』あゝ完全にゲーブル飴の逆襲であります。

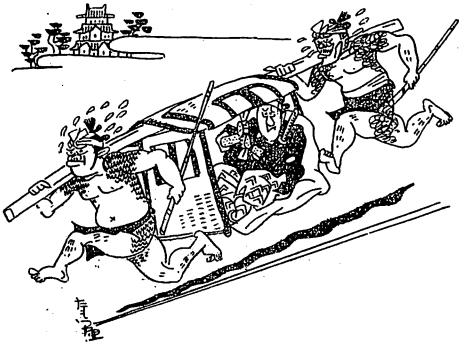
（漫畫・辰井じゅん）

(繪・文) 大槻たもつ

今月は久し振りで關西陣總出の『忠臣藏』が出るとのこと、お角力ならぬ四十七人裏表火事裝束のだんだら模樣に染めあげて『待つてました』の大向ふ山と川とにこだまして さぞ大人氣が湧くならんとドウトンボリセクションの一隅から山鹿流の陣太鼓、鳴らして山崎の與市兵衛、お提灯ブラブラふりやせう。

とんだ枕言葉で恐れいります。お芝居、映畫、講談、浪花節、萬病に利く妙藥は『忠臣藏』と承つておりますが『漫畫手本忠臣藏』とか申しまして考へようによつちや吾々漫畫屋渡世にしましても無くちやならない飯櫃かとも思はれます。〃泰山鳴動鼠一匹〃とか云ふ名台詞が御座いますが、忠臣藏は丁度この反對で何んと云ひますか〃鼠チュー〳〵泰山鳴動〃とでもしなけりや勘定が合ひません。

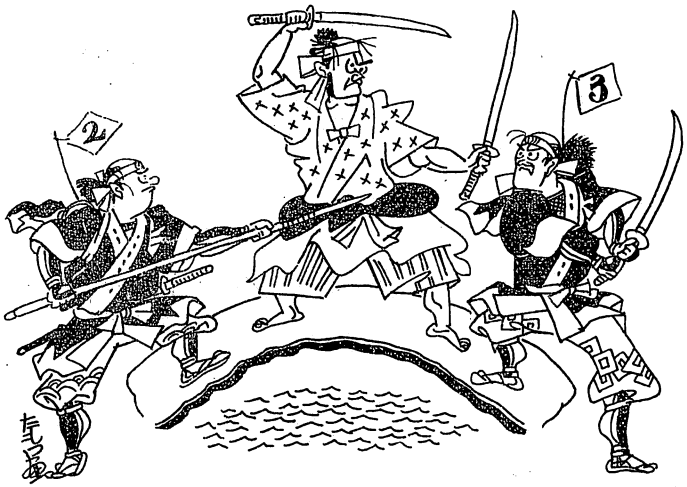
吉良上野氏がも少し肅正化された官吏であり、淺野氏の夫人にモーションをかけたりせず、且つ淺野氏自身がも少し世間ずれしてゐたならば赤穗に急に數十名の未亡人も出來なかつたゞらうし、又東京市の名所繪葉書も一枚減つてゐただらうと思はれます。が又一方から考へますと、あの時あゝだつたから今度こうして面白いお芝居が見られる、山科の土地も繁昌する、『鐵道唱歌』の作者も途中で行詰らずに作詞が出來た、と斯う



又考へられます。人間の歴史と云ふ奴は誠にもつて面白いもので御座いまして斯く申す私なんぞでもあの時、お袋の腹から出るのを一寸斷つて何處か他の腹から草鞋を履かせて貰つてゐたら或は今頃は下手な漫畫なんか描く要もなく……從者の四十七人程も連れて……おつと話が飛んだ方へ轉換、要らぬ私事に及んで申譯御座いません。

ところで斯んなことは何うでも好いのですが、あの四十七人の同志がブラ下げてゐる番號札です。いろはにほへと……す迄、丁度うまひ具合に人數が四十七で多くもなく少

なくもないピツタリ當はまつたのですが、若し人數がもう五六人多かつたなら大石氏はどんな札を下げさせたかと云ふことです。何しろ忠勇義烈の武士ばかしのこと、にごりをうてば、ぼ、べ、も不愉快だし、矢張り一二三の番號札にしたらうと思ひます。はたして何れが好いか？



つまらぬ詮議ですが、……

最初に上野介を發見したのが、す、號とみ、號だつたなんて云ふ洒落よりは、女の衣服をかむつた附人平八郎氏が二號と三號に狹まれてギュー〳〵云はされたてな具合の方が何んだか嬉しい氣持がします。

つまらぬおしやべりばかりしてゐる中に紙數も殘り少なになりましたが、この『忠臣藏』なる題名の起因なるものに二說があると云ふこと。其の第一說、これは讀んで字の如く、忠臣四十七名心を合はせての快擧、つまり何處のお家騷動でも惡人の數は多いが忠臣側は比較的少數なもの、それが斯んなに澤山、藏にしまつておく程一度に出た。忠臣の集り、忠臣の寄場、などから忠臣藏となつたと云ふもの。其の第二說、これは少々こみいつてゐます。江戸表に御主君の急變が起つた。當時での〃富士、燕〃とでも云ふべき早駕籠、これが第一、第二と夜を日についで赤穗に於ける城代家老大石氏の許へ、注進、又注進、一刻も早く知らさんものと先を爭つた。つまり注進くらべをやつた。このクライマックスがなまりなまつて「注進くら」『忠臣藏』—了—

ゴシップ

水谷八重子の姉さん竹紫夫人はカフエーの名を聞いてさへブル〳〵と震ひ出す大のカフエー嫌ひ、それが福岡での興行の時、よん所なく招待されてカフエーの入口に立つてメンバーがいきなり、八重子さアーン、ゴシンキ——にビツクリして八重子の肩に取りつけば「姉さん、人違ひよと」八重子が辯解しても、竹紫夫人さつさと引上げたので招待はオヂヤン。女給の八重子さんと女優の八重子さんの顏合せとは流石のメンバーも氣がつかなかつたらしい。

内侍は釣る

（繪・文）妹背平三

デパートの靜寂――そりや君デパーの休日だよ――と誰れもが云ふんです。

だが、違ふんですよ。それこそ芋を洗ふが如きあの大雜踏のなかのデパートの靜寂――どうも云ひ廻しがチト拙いですな。

つまりですな。喧々ごうごうたるデパートの或る階の或る賣場のこれは又物淋しい靜寂の意味なんです。×階の呉服特選賣場。御存知のマネキン人形きらびやかに竝ぶ――賣場の――ひとときの――の靜けさ。

詩人なら死の靜寂といふです俳優ならダンマリといふです

デパートでは北極といふですことほど冷たく靜かです。

デパートの北極と呼ばれる此處呉服賣場の特選賣場――。

各時代別衣裳展といふ呼びものゝマネキン人形も最初は人氣を呼んでゐたんですが最終日の今日ではお客はおろか店員仲間も此處へは顏を見せるものも至つて少いです。

賣場にタッタ一人殘つてゐる男店員のK君。各階に流れるあの洪水の如き客足を遠くうらめしく聞きつゝこの次の定休日の彼女とのプランオブピクニックに一生懸命であつたです。

――と――『店員衆』

店員衆と呼ばれるのは始めてですが兎に角お客様なんだからピクニックの豫定表を兩手の中へ押しこんで『へッどうも』と顏をあげてニッコリ（ニッコリ笑顏で應對を！）といふのが當店のモットー

お客さまは女の方（聲が餘つ程きれいな方だ！）

が、お客様の姿は見えない。呉服をご覽になつてらつしやると思つて早速、そちらへ飛び出してグル〳〵と賣場を見廻したんだが一向お客さまらしい人影も見えない――はアて、たしかに呼ばれてしかも女の方の聲とまで分つてゐ乍らお姿が見えな

いのはおかしい――どうも彼女のことを思ひつめてゐるための幻想らしい――と、

『これ店の衆や』ときた――

ドキンと心臓を押しつけられたはづみで思はず前方を見上げると――あゝ――なんといふことだ！　ズット時代順に竝んだ人形の中から聲がする！

アツ！　と聲を出したんだが思ふ樣に發聲が出來ない。不思議な力にヅル〳〵引つぱられてその人形の下へ――これは足利時代の女臈人形。

『いま流行の衣裳一揃全部揃へて妾といつしよに持參しや』

おつそろしく命令的だ！　と内心反感を抱きつゝも、その妖しきまでに冴える美しい彼女にひきつけられて一揃への衣裳を店の包裝紙に包みうや〳〵しく差出せば、『妾と共におじや』と云ふと思へば不思議！　スル〳〵と彼女、いや彼の女臈人形は賣場をツーツーと横切つて――あ、あ、とK君あぶら汗をにじませて後を逐つたです。

三階へ――二階へ――一階へ――まるで魔ものだ！　群衆の中を若鮎の樣にヒラリ〳〵と交して行く彼女の姿。表へ――しかも絢爛たる衣裝のまゝの彼女はヒラリとタクシーの中へ――そして、K君をニツコリ見たです。

K君はあやつられる木偶の如くそのタクシーへ吸ひ寄せられてそのまゝ。

どこをどう走つたのか、高臺の高級サラリーマン住宅街らしい一角でピタリと止つた。

無言でおりる彼女。K君も無言で、その豪壯な邸宅へ――

『次の間にて待つように』

と命ぜられ、何にが何やら分らぬ頭にも品物は現金で――といふ店の店規は夢忘れねばこそ……なん刻、それからたつたのか……ウツスリ覺えているのは彼女が隣の居間に下つてから衣づれの音サヤ〳〵と鳴つてやがて細々たる人の聲を聞いたやうだ――

突然――頭の上でおい！　と怒鳴られたです。

それが警察の人だと分つた時自分の意識も俄然呼び返されたです！『や、やられましたツ』――で今日のあの夢幻的なモノガタリをやつたです。

そして、そして、あの不可解なるナゾを『一體あのマネキン人形は何んでせう、どうしても私には不可解です』ときいたです。

――そこで警察官はニヤ〳〵と笑つて云つたです。

『――あれはモチ人形さ。あれが勾當の内侍さ』

演劇研究月刊雜誌「道頓堀」の
月極御購讀をお奬めします

青山福藏さんにきく

東西大向ふ——

（繪・文）櫓萬平

浪花座の九月興行〃生きてゐる小平次〃にれつとりとした情痴の世界を描寫して、餘す處も無かつた扇雀丈へめがけて三階席から飛んだ大向ふ

——成駒家——ッ

——親讓り——ッ

あの大向ふのかけ聲を一手に引受けてゐるかの樣な存在が、この青山福藏さんだ。

十三の時からの病みつきで、酒も女も、定職まで打つちやらかして、三十幾つのけふまで總てを芝居に精根をぶち込んだ劇狂〃芝居は初日〃と云ふ建前から初日會なるものを組織して、自らも三階席に陣取る〃大向ふの帝王だ〃

高麗家から日本一の折紙をつけられた福藏さんを摑へて〃東京、大阪大向ふ論〃を聽いて見る。

——大向ふ生活（？）廿五年間の面白い話はありませんかなア。

——役者はんにすつかり知られたことですか、今ではお客さんの方に馴染が出來て初日に顏を見せんと「病氣でつか？」と尋れて下りやはります。

——芝居はやつぱり初日に見るもんですか？

——さうですとも、僕ら初日開幕前に三階へ座り込んだら、終幕まで舞臺と睨めつこだす、初日がすんだら五六日は全然聲が出まへんで初日でのどが破れてしまひまんね

——大向ふもやつぱり流行がおますか？

——今、皆んながやつてる「とてもよろしおます」とか「何でこないよろくおまつしやろ」なんか僕か流行らしたもんです。

——昔と大分變りましたやろな？

——成駒家、高島家などゝ云ふ屋號は變りまへんな、尤も昔は「なアりこまやア」と長く引つぱつたもんですけど、今は「ンこまやッ」と鶴の一聲式がはやつてますわ、東京の影響でんな。

——東京の大向ふはどないです？

——入れごとが多うおまんな役者の住居の町名や、電話番號を呼んでまんな、けどすたらんのは矢張り「ッとはやッ」と云つた屋號ですわ

——大向ふの傑作と云つたやつは？

——こないだ東京で伊勢音頭のおしかになつた助高家高助に「三浦環！」とやつた……なんか傑作だつしやろな。

——大向ふのコツと云つた樣なものは？

——それがムツカしゆおまんれ、一番無難なのは役者の出入りの時でつしやろ、この呼吸が悪いと芝居をこわしまつさかいな。

——芝居は歌舞伎專門ですか？

——それや、成駒家はんに可愛がつて貰ひましたし、又見應えおまさかいな、けど、新劇、新派、喜劇、家庭劇、レヴュウなんでも見まつせ。

——ターキーも見ましたか？

——僕はオリエファンでつせ、こないだもオリエ後援會の人を知つてゐる關係で大向ふをやりましたが大向ふも競爭になるとムツかしなつてな、相手が「ターキー」とやつたら、こつちは「オリエ、オリエ」と相手を後をついて、餘計にかけ聲しまんれ、素人にはこのコツが譯らん。（大向ふも、職業選手にならなきやあかんらしい）

——大向ふで叱られた經驗は？

——今年の正月、京都の南座でレヴュウの時オリエとやつたやつが餘り聲が大きい云ふて巡査に怒られました、後にも先にも之丈ですわ

——好きな俳優は？

——みんな好きだす（と、仲々如才がない）中でも扇雀さん、天外さん、長十郎さん、辰巳さん、レヴュウではOSSKの秋月惠美子さん、東京のオリエさんだす。

（ほじくれば果しのない福藏さんの〃大向ふ〃論だ、最後に、聲を出す秘訣を訊ねると）

——あめ、それから黑豆の煮汁……大向ふもモトデが入りまつせ。

演劇飛行便

東京だより——大阪の皆様お變りありませんか。東京今月の劇界は何れも興趣つきぬ好陣立です。例によつて概要をお知らせすることに致します。

明治座は既に大阪の皆様も御存知だと思ひますが先代市川左團次の胸像建設記念興行でして、出演俳優は現左團次をはじめとして羽左衛門、幸四郎、仁左衛門、猿之助等當代の粋を集め、狂言も先代に因み深いものを選んで、いやが上に歌舞伎の秋を燎乱たらしめ、好劇家をエリキのやうな魅力で、グン〳〵ひきつけてゐます。狂言は第一「碁盤忠信源氏礎」第二「慶安太平記」第三「神靈矢口渡」第四「仕初式」第五「連獅子」第六「黒手組曲輪達引」では清元延壽太夫が出語ります。

次に東京歌舞伎座を御承知でせうか——菊五郎吉右衛門二座合同は私達には見逃せないものですが宗十郎三津五郎友右衛門の加入もあり序幕「藤橋だんまり」一番目「近江源氏先陣館」中幕「鞍馬獅子」「三社祭」二番目宇野信夫作「雪地獄」大切「乘合船」の好狂言の魅力に更に興味を添へるのは盛綱陣屋及び雪地獄で菊吉が顔を合せる事——この人達にしてこの舞臺、どうです宿りがけで御覽にみえませんか。

東京劇場を御紹介しませう、全新作を提げて、秋の劇界に風雲を呼ぶ——と宣傳子の御口上があつて、新派大合同で、第一眞船豊作の「いたち」第二、野田高悟作の「家庭晴雨計」第三、瀬戸英一作「新譯宵庚申」第四、川口松太郎作「風流深川唄」それから……

新宿第一劇場ですが、青年若手歌舞伎は「ひらかな盛衰記」「橋辨慶」「寛錄先代萩」「生玉心中」「道中膝栗毛」で、他に松莚改め澤村訥子の「口上」で賑はつてゐます。

× ×

關西だより——東京だよりありがたう。こちらも絶好の芝居シーズンとあつて賑つてゐます簡單に御紹介しますと——

大阪歌舞伎座は關西大歌舞伎で「元祿忠臣藏」の五幕二十三場に今宮は蟲所なり聾なりの「十萬堂の秋」それに「保名」と「月大漁」

中座は井上水谷の名コンビに新鋭を揃へて氣を吐いてゐます。それから……

浪花座は前進座の創立五周年記念にあはせ、早いもんですね——道頓堀進出第十回の興行でもありますので俺たちの力を世に問ふといつた意氣込みで歌舞伎十八番「勧進帳」に長谷川仲氏の「人斬り伊太郎」他二篇。

角座は關西新派の續演ですが、道頓堀に堀正夫他が返り咲いたのはうれしい。此の座をグツと見渡して思ふ事なのですが、何とその連名中に、かつては座頭だつた人の多い事よ。關西唯一の新派劇を改めて、關西新派大合同とする方が面白いのぢやないでせうか。

神戸松竹劇場は扇雀小太夫菊次郎等の若手歌舞伎で、京都南座は新國劇・文樂座は三日から本格興行といつたところです。

かく見渡せば、私の休日はすくなすぎます。（道頓堀ガイド參照）

傍白

大木戸徹

古い話を一つ――と云つても、明治の事である。東京に二錢團十郎といふ俳優があつた、藝名は坂東和好、後に又三郎と改名したさうだ。この俳優、顔といひ、藝風といひ、何から何まで九代目團十郎そつくりなので世人が斯く呼んだのであらう。惜むらくは、彼名門でない故に、木戸二錢の小芝居に働いた。だから二錢團十郎といふのである。當時を知る人の話に依れば「忠臣藏」の四段目でも彼一流の新演出で、他に眞似手のない新趣向を見せたといふ話である。彼の由良之助、押出し、貫祿共に團十郎に匹敵したといふから凄いものだ。その由良之助は「城明渡し」をやらないのである。判官が切腹して後、家中一統の燒香がすんで、一同菩提寺へ引揚げた後の、大廣間の眞ん中に由良之助一人が殘る。そしてチョボの淨瑠璃には『明渡しの段』を語らせ、廣間の燭臺を一つ宛消して廻り、正面の襖をあけると座敷の遠見となる。そこで由良之助は亡君形見の短刀をなめたり『涙はら〳〵』の所をやつてのける。そこへ一家臣が出るのを藥師寺の家臣と間違つて、だんまり模樣となつて花道へ引込といふやり方ださうである。さうしたやり方の可否は第二として、ともかく昔から牢固として傳はる所の『城明渡し』の型を、そんな風に解釋して見せた事は單に一種の奇をねらつたといふだけでなく、確かに理屈にも叶つた演出だといへる。こんな頭のいゝ俳優がもう一つ有名にならなかつたのは、世間の事大思潮がいけないのである。名門や門閥の子弟なら一躍認められたかもしれないが、彼が一無名俳優であつたから遂に二錢團十郎のあまり有難くない呼稱を以て、今日一部の劇壇人の記憶に殘されたに過ぎないのだ現代なら何とか認められて騷がれたであらうと思ふ。

× × × ×

歌舞伎が門閥や家柄を尊重することも必要である。しかし餘りにその傾向にのみ終始して、實力の涵養を怠つたならば、將來は恐ろしい結果になる。新興演劇に追ひまくられて劇壇の片隅に、能樂的存在を止めるに過ぎないものになるかも知れない。新派や新興劇團のそれの如く、歌舞伎畑にも實力本位の俳優をもつと延してやる機會を與へるこそ、最も急務ではないだらうか。東京にしろ、大阪にしろ、歌舞伎は第一線の完成組から、若手の未完成組に漸やく多大の興味と期待がかけられやうとしてゐる。完成組の諸名優にはそれ〴〵立派な『お家藝』や『役柄』があるが、未完成組はこれからの時代に、どんな新領域を拓いて行けばよいかと半ば暗中摸索の形はないか。勿論。歌舞伎藝術の保存は吾等の義務なりといふ自負はあるだらうが、また一面に流れる時代に棹さす意味から、新しい芝居への關心も充分持つてゐる。だがその新しい芝居とはどんなものかといふ定見に就ては、未だ誰もが判然と見透しをつけてやつてゐるものがないやうである。これこそ、これからの芝居だ、歌舞伎俳優にもこんな目覺しい芝居が出來るぞといふ氣慨を一つ見せて欲

しいものである。徒らに築地系統の新劇や從來の新創作劇程度を一歩も出ないもので事足れりとしてゐる時代ではない。

× × × ×

井上正夫の中間演劇を觀る。新派と新劇の中間を行く演劇といふ事らしい。だが凡そ中間演劇なんて呼び方こそ意味ないと思ふ。井上は自分の一座を新組織する時、何か一つ演劇道に新しい標柱を立てゝおきたいと云つた。その意氣や壯である。が何も『中間』といふ冠詞を以て、自己の所信を不徹底なものにしなくてもいゝやうに思はれる。何故、ハッキリと現代の新派劇に對する反逆だといはないのか。ラヴローマンスやヒューマニズムの演劇から一歩も二歩も踏み出して、現代社會層の斷面へ鋭どいメスを向けた演劇、さうして新樣式の舞臺、井上の企劃はそこにあるのだ。歌舞伎から散切物の芝居に轉化した明治時代の時流の變遷と同じやうに、今までの新派から踏み出して次の時代の演劇の創造に努力しやうとする井上は目覺めたる俳優といはねばならない。今後の努力を切望する。

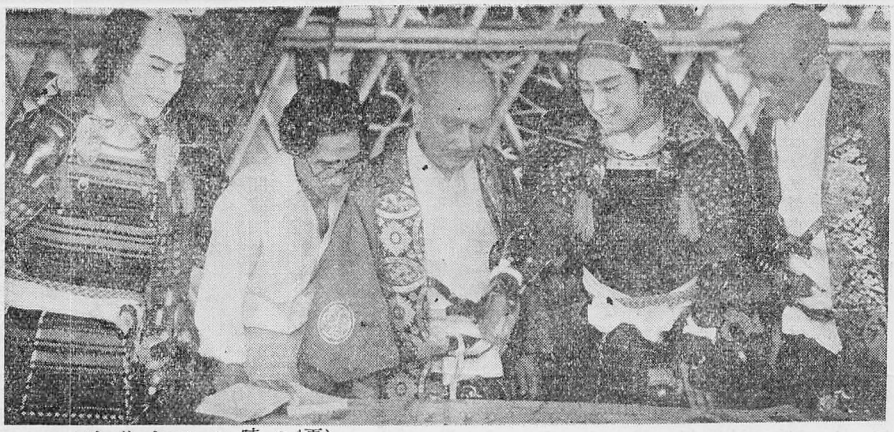
× × × ×

新派でも、歌舞伎でも、近頃の芝居は、一體何を見せやうといふのかその目標がハッキリしてゐるのかどうかを疑ひたくなる時がある。これは芝居の當事者もさうだが、見物だつて判らない問題だ、一時は猫もシャク子もと云つては悪いが、そこら邊の端芝居に至る迄がイデオロギッシュな演劇に終始した時代があつた。何かといへばすぐ『生活權』を主張し、あらゆる資本主義に反撥した時代があつたやうに思ふ。しかしこの傾向は明らかに解消し、時代思想が一變した今日、演劇の底に流れる思想も變化した。そしてどんなものが要求され出したか。それはモーラルなものである、新しい人道主義の上に築かれた倫理的な觀方に統一されやうとしてゐる。即ち新道德主義の演劇それがこれからの芝居を支配する思想ではないかと思はれる。

× × × ×

今更、事新しいやうに歌舞伎レヴュウを考へてゐる企業家がある。外國人に見せる爲めに、日本の歌舞伎に西洋音樂を使用し、レヴュウの踊り子を登場させて、けんらんな舞臺を見せやうといふのだが、果してそんな風に、日本固有の歌舞伎劇を、西洋のバタでいためたやうなアレンヂの仕方で食膳に供しても、外國人はよろこんでたべてくれるかどうか同じ歌舞伎劇のレヴュウ化なら、人の知らないやうな古劇を復活させて、それをレヴュウ風に見せた方が、外國人はいくら懐しがるかも判らない。例へば今度大阪歌舞伎座に上演されてゐる「元祿忠臣藏」の如く、百數十種もある古來の「忠臣藏」中から面白い場面のみを蒐集新編成するといふ方法も、歌舞伎劇と、大衆を結びつける賢明な策の一つといへる。

外國人に紹介するなら飽迄も日本固有の純然たる姿のまゝ見せて欲しいものだ。或ひは時代的に大改訂が必要であらうとも、斷じて西洋化される歌舞伎劇には大反對だ。



（夏の陣のスナップ）

鑑賞の秋

（げんた生）

清澄な秋はすみ切つた理性によつて、ものゝ情をかみしめさせてくれる。

一年のうちで、藝術の眞の精神に、最も深く力強く觸れさせてくれるのはいまだ。目を閉じてゐても秋を感じる、車に乘つてゐても秋を感じる、暗い映畫館にも、絢爛たる劇場にも、秋はひし〳〵と充滿してゐる。どこも、かしこも死んだやうに靜かだ。自然をさへぎる扉のないのがうれしい。

私は誰かゞ『あれはつまらんよ』と話してゐるやうなものでも一度は自分でそのつまらなさを確めねば氣がすまない質だが、映畫の場合、他人がつまらないと評したものに案外いゝぢやないか、エ、君——と言へるものを見つけて愉快がる惡い癖があるが、事實こんな時は愉快なのだ。だが、よいと一般に噂されてゐるものは私だつて見度い。いゝものなんか見てもつまらない等と云ふ程私だつて變人ぢやない。

まア、いゝにしろ、わるいにしろ私は秋に封切られるものゝすべてを待つてゐる譯だが、『大阪夏の陣』など待遠しいものゝ一つだ。

秋・封切られる映畫のスジ

新興キネマ・阪妻谷津撮影所
秋季特作
全發聲『風流小唄侍』

原作：原　巖
脚色：御舟　伸
監督：沖　博文
撮影：上岡喜三郎

梗概：家傳の名槍地藏廣重それを死守して父は非業の最期一子佐十郎（妻三郎）は執擁な家老逸見の追手を逃れて脫藩し江戸へ出奔親友押川（岡田嘉久也）は妹純江（月宮）の戀情を察してせめて將來の婚約を望んだが、佐十郎は明日からの浪々の身を思ひ心中では感謝

し乍らもその戀を容れなかつた。

それから三年：江戸の佐十郎の放浪生活は常に豪放洒落弱者の味方となり、瞼の父の影法師として名槍廣重を片時も離さぬ奇異な姿は長屋の守り神、惡魔よけ、槍の先生として下町一帶の人氣ものだつた。同じ下町の顔役二天門の保五郎（柴山）は岡倉の殿様がお歌に（築波）御執心なのを知つて槍の宍戸、關口、岩瀬（坂田）等を訪ひ御意を得ようとするのだが、肝腎なお歌が近頃噂の高い佐十郎にぞつこん參つてゐるのでテコでも動かず、保五郎の焦燥は佐十郎への怒りとなり事毎に喧嘩は絶えなかつた。

もう一つ岡倉の執心は名槍廣重を手に入れる事だつた。

押かけ女房のお歌が佐十郎の涙宅へ來た時、丁度折惡しく其處には藩の運動に流用した公金の穴埋を見かねたお歌は五百兩で岡倉へ身を賣るべく保五郎を訪れる之を知つた佐十郎は槍も欲しいがお歌をみすみす人身御供にはやれず意を決して岡倉の屋敷へ乘り込んでみると、花嫁姿のお歌も廣重も岡倉の手中に秘められて、今更の如く彼の奸計に怒髪の佐十郎は荒獅子の槍踊りを阿修羅と揮くのだつた。お歌は？　純江は？

……

松竹京都　特作

オルート！キー

『お　染　半　九　郎』

脚色：監督：冬屬　泰三

（夏の陣のプッナス・）

の算段に訪れた押川と純江に行逢つてしまつた。女同志のお歌と純江は一目でそれと察するものがあつた。

穴埋めの調達を引受けた佐十郎は兎も角押川兄妹を歸したが、その苦面は二ヶ月期限で一時地藏廣重を手離すより方法がなかつた。然し廣重を失つた佐十郎の生活は氣の毒な程寂しいものだつた。之

右　長二郎、伏見のお染半九郎
左　高田ピロの『兄の誕生日』園枝・眞山・三條の諸嬢

〃配役〃

半九郎　林　長二郎

お染　伏見信子

梗概：山村の邊りに母と以前には仲間だつた常助と浪々の佗住居をする菊地半九郎は祇園で〃太平記〃の講釋を讀んで僅かの糊口をつないでゐたが、フトしたことから三人の浪人共に取卷かれてゐる所司代板倉和泉守の一子榮之助をその危地から救つたのが緣となつて、所司代に勤める事となつたが菊地の組頭駒形才兵衛は和泉寺直接のお聲がかりで來た半九郎を快からず思ひ、事毎に半九郎に辛く當るのだつたが自分の任官をあれほどにも喜んで呉れる母の事を思へば、一切を堪へて仕へてゐる中祇園の美妓お染と知合ひ、互に憎からず思ふ樣になり、彼にも漸く明るい世界が來た樣に思つたが、半九郎の母は息子が駒形やその輩下の者たちから何彼につけて辣く當てられてゐると知り、事なき樣にと秘かに菓子箱に金をひそめて駒形の處へとゞけたのが災のもとゝなり半九郎は衆人の前で恥しめられた、そのことを知つた母は子供への申し譯に自刄して果てた。その母の葬式の日、あくまでも半九郎を憎み苦しめては喜ぶ駒形に半九郎が葬送を濟ませて歸るのを輩下の者と共にお染まで無理やり連出して待ち構へ又しても嘲笑の言葉を浴びせた。母あればこそ堪へられるを堪へて來た半九郎も、母なき今、駒形の嘲罵に逢つてはこれ以上堪へることが出來なくなつて双傷沙汰、目頃自分に仇した駒形とその輩下の者をその場で斬り伏せたが、例へどうあつても多數の人を殺めた以上罪に問はれるは當然と覺悟をした半九郎は未だ新しい鳥邊山なる母の墓の前に死なば諸共とついて來たお染と差し違へてその若き生涯を終へる。

新興『新月抄』宮部は酒と女のたゞれた過去を清算しやうと東京を捨てゝ信州へ音樂教師として赴任した、そこで清純な少女田島伶子を知つたが……（霧立と立松）

丸ビル語

柳家幽太郎

道頓堀の思ひ出

僅か二三時間のお芝居、而かも支那語の陳紛漢を聽かされて大枚十圓、それでも當時歐洲戰爭の餘波を受けたインフレ景氣で、そば屋の出前持でも、シャツのポケツトには十圓紙幣の一枚ぐらひは皺くちやになつて入つてゐやうといふ頃ですから溜りません。公會堂ギツシリ鮨詰めの盛況、主催者はお蔭で多分の餘收に有りついたといふことですが、そんなことはどうでもよいとして、機を見るに敏なる興行關係者は直ぐに又此あとを追つかけて、八年の夏ごろに、今度は支那の女優を呼び寄せることにしました。女形より眞物の女優の方がまた珍らしからうと主催者は鼻高々のつもりで居りましたところが何ごとでも二番煎じといふ奴はあまり有難くないモノで、そこは賢明なる一般フアン諸君に於かせられても、中々ウカとは財布の口を開かない、皺くちやの十圓でも、さうムザ〳〵とは使ふわけには行かないと云つたものでせうか、今度はさう巧い工合ひに問屋が卸さなかつた。

浪花座へ迎へたのが趙碧雲の一行。歌劇といふものゝ知識が甚だ缺けて居りました當時の觀客に不意に彼の異樣な聲の支那の歌を聞かしたのですから見物は甚だ途方に暮れた有樣で、三圓五十錢の見物料が惜しそうに出て行く人も多かつたのでございます。

活動寫眞にいたしましても漸やく大作が何年に一本輸入されるといふ時代ですから大變です。一つ大作を手に入れたとなると、何しろポンと入場料五圓といふ脅かし方、インフレランス、などゝいふのも其一つで、當時まだ土間も座席であつた時代の中座で例の寫眞界の鬼才小林喜三郎氏が提げて現はれました。それでも、見物は煙に捲かれて財布をはたいたのですから、お目出度い次第で何しろ好況時代の所以でもありまして、五圓十圓の觀覽料といふものが脅かされたとは知りながらも、出してゐたのですから、大いに國民財政に餘

藝テモノ語

裕があつたわけで、結構な世の中です。これはゲテ物ではありません、正眞正銘の世界的藝術家でありましたが、アンナパプロワ孃が、得意の瀕死の白鳥を見せるといふので松竹では大騒ぎ、何しろ泰西の藝術を見せるのに、何んぼ格式は古くても中座の座席では調子が悪い、椅子席でなければモノにならん、ところが、椅子席では角座の土足劇場、より外にないよし、それならば、といふので絨氈を買ひ込んで土間に敷き詰め、緞帳も吊り代へて、裝飾萬端兎も角、見たところ近代劇場の體裁を眞似て、これが即ち觀劇料十圓、それでも切符は豫約で羽が生えて飛ぶやうな盛況。

× ×

サテ此處らで話題を一轉しまして、今度は好みの變遷、時代と共にうつりかはりますところの、興行物、觀覽物の、旦ンサア方の又おかはりになつてくるところを、ちよつと申上げます。凡そ流行は逆轉をくりかへすもので、地球と同じやうに一まわりすると又元のところへやつてまゐりますのは、いつの世にもかはらない原則だと見えます。唯今では、若い方々を狂喜せしめて居ります、ビレューといふ代物、寶塚の惣本山からあの親不孝聲を張り揚げたのが始まりで、當今東のターキー西のアーサー、いつの間にやら本格的の大興行になつて、本場のフランスでもこんな立派な舞臺はない、といふやうな豪華なものになつてしまひましたが、お爺サンお婆サンにはこれが又中々に癪の種で、風呂敷の着物を着て幼稚園の遊戯をしてるのに何故に入場料を拂ふことがあるもんか、といふ大變な御立腹で、家庭ドレスのお孫サンと大口論が始まらうといふ、飛んだ家庭ナンセンスが起ります。イヤモウ時勢と大勢には勝てないもので、大枚二圓五十錢の入場料の歌舞伎座が鮨詰めになり、お孃チャン方の、ターキーイイイ、ターキーイイイ、といふ御聲援の聲がまるで悲鳴のやうに聲こえてくるといふ物凄い有樣です。といふやうな譯で娘サン方の踊りなら中學生か大學生が多からうと、まだ知らないお方はお思ひになりませうが、男の學生などは一人もファンには居ないのですから安心なもので、教護聯盟の先生方もコレヤ不思議ぢやナァ。と案外に思召してゐらつしやるやうでございます。肉體美と曲線美が賣物のレビューを同性の娘サン同志で鑑賞してるんですから

藝テモノ語

これほど天下泰平なことはなく、こゝ等が西洋と東洋の思想の違ふところとでも申しませうか、日本はまことに結構なお國柄でございます。

ところが明治の時代に遡りますと何うなるかと申しますと、女の子が太股どころか、小脛をちよつと見せたといふくらいで、モウニキビの出來た若い衆は押すな〳〵と見物に出掛けたもので、千日前邊りには、その頃『娘手踊』『ヘラ〳〵』踊などいふ小屋掛けがあつて、若い男を挑發するやうな絞の浴衣に赤い蹴出しをちら〳〵させた娘連の拙い手踊りを見せたのです、勿論踊りの巧い拙いなど何うでも構ひません、問題は赤い蹴出しからチラ〳〵ふくら脛を見せるところにあるのですから、まことに以て簡單至極、入場料も又簡單至極三錢か四錢で、この享樂が得られるといふ。これも又天下泰平の瑞祥であつたやうに思ひます。

ところが馬鹿にならないもので、かうした白粉屋の飼猫見たいな踊り子の中にも相當名を賣つたものも出來、借家の一軒も賣り飛ばした道樂息子もあるには有つたので『娘手踊り○○八重吉』などいふ名は可なり知られたものでした。

何しろ女の子の脛がチラ〳〵するだけでこれですから、當時モシモ現今のやうな半裸體を見せたらどんなものでせう、日本中それこそ全つぷれになつたかも知れません。

この娘手踊りに續いて、見世物場を賑はゝしたものが、江州音頭、河内音頭の類で、唯今の東京音頭のやうにあつて面白く、當然賣り物は踊り子の赤い蹴出しにあつたのですから、別に進歩のあとは少しもありません。一晩中同じ節と同じ手振りを見せたり聽かしたり、やうこれで辛抱したものだと見物の氣の長いのに感心させられますが、そこがそれ節や手振りに見どころがあるわけではないので、巧い仕組みに出來て居ります。而しこれには後世遺がに名を殘したやうな娘サンはゐなかつたやうです。從つて家を賣り飛ばした道樂息子もなかつた始末です。

その次が今度同じ目的は備へてゐても、グツと好みがグロテスクになつて、『海女の手をどり』です。能登か鳥羽あたりの不良少女を引き連れて來て少しばかりの手踊を仕込み。五六人が舞臺に並んで野趣滿々たるところを漂よはし、踊りが濟むと急調な三味と

藝テモノ語

太皷をキツカケに一齊に浴衣をかなぐり捨てゝ、赤い腰巻一つになつて、前面の水溜りへドブンと逆さに飛び込むといふ仕組み、そら水の中の女の肉體赤い蹴出し、少々色の黑いぐらひは、我慢をしたものです。無論これは冬の見せ物ですから、見物は一しほ同情をしたもので、水の中から海女の若い娘がピイ〳〵と吹き鳴らす口笛の音に又別種の哀感を誘はれて各自思ひ〳〵の一錢二錢、中には五十錢も張り込んで、水の中へ投げ込んでやるといふ特別ファンも出來やうといふもんです。

以上のやうな原始時代の見世物が進歩して唯今のレビューが出來たのか、それはダーウキン氏に聞いて見ねばわかりませんが、女の肉體が舞臺の賣り物になるといふことだけは、兎も角かはらない原則らしく思はれます。見物側から云ひますと、若い男の血潮を沸かさせる筈のものが、近ごろでは、若い娘サン連が興奮してゐるんですからこれだけは少々ちがつてゐるやうで、これぱかりはダーウキン氏もお解りにならないでせうが、ところが、モツト仔細に觀察して見ると、ターキーは女として見てゐるのではなく、男姿、即ち男として見てゐるのださうで、かうなると今度は一層變態的で罪が深くなります。イヤ理窟は拔きにして兎も角當節は昔と違つて思想も複雜になり考へて見ればおもしろい世の中です。

（八月號につゞき九月號に連載する筈でしたが、都合上今月號でまとめてお目にかけました。）

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！
◇モダン階上浴室新設◇
南地ホテル
一宿 三圓 二圓 一半
一 額半 憩
南地戎橋電停前
電話南四一四・四四一

扇雀と菊次郎

九月浪花座の印象

大橋孝一郎

幾ら役者が家系や地位に惠まれてゐるとは申せ、お山の大將で收つて居られてはどうも困る。矢張りたゆみなき修練いばらの道をかき分けて一苦勞しなければ誰もが相手にしなくなつて終ふことは必定だ。

扇雀の東京連中に交つての修練が、たとへその期間が短期日であつたとは云へ、扇雀自身のスランプ打壞と、今後の彼の動靜を思考する上に、大きな刺戟となり、藝道精進への發憤心を大いに助長し、拍車をかけたことを欣快としたい。

お山の大將であつてはいけない。——賢明なる彼は既に從來の自己滿足より出發したる舞臺上の欠點を悟つて、今後の劇壇に處する自身の姿を、ジックリと見直したに相違なからう。例へば、九月の浪花座で彼の舞臺に接して感じたことだが台詞の抑揚や發聲法にも研究の跡が伺へたし、立居振舞ひも餘程以前とはアクの拔けた處が見えた。僕は彼の東京での修練の數ケ月が、彼生涯の舞臺藝に對して一ツのポイントの役目を果し得たことを喜びとしたい。

最近の彼の氣持程、野心に燃え、張り切つてゐる時は層てなかつたであらうことは斷言出來る。その氣持が直接に彼の舞臺面に泌み出て居ることを見逃す譯には行かなかつた。即ち、九月の浪花座での彼の持役の一ツ一ツには今迄の扇雀には見られなかつた異樣な持味が——勿論一歩前進した心構へが立派に受取れたではないか

何か仕樣とあせつてゐる氣持、東京の連中にどうでも引目を取りたくないと云ふ立派な氣魄。その眞劍なひたむきな現在の態度が、たとへ舞臺の演技の上に未だ未だ色々な難點を指摘し得るとは云へ、彼の熱技に一段の光彩を添へてゐたことは否定出來まい。彼は惱んで來た。そして現在でも惱んでゐる。いや將來でも恐らく惱み續けることであらうが、彼の父が名だゝる名優だつたゞけに、餘計に彼には心苦しい藝術への焦躁が大きい譯であらう。が、その弛みなき心構へがこれから扇雀の藝格を築き上げて行くのではないだらうか。

伊勢音頭を見て此の狂言も、今日に於ては單に相の山ぶしで巫山戯る林平以下三人のおどけた動作と如何にも昔の人の考へそうな二見の浦に日の出をあしらつた舞臺裝置の前での世話暗闘の外に何等の興味をも齎さない狂言となり果てゝ終つたことを痛感した。就中此の脚本の中心とも云ふべき愛想づかしの場のだらしなさは、双傷に至るまでの劇的境遇の缺乏さを加へて、一入此の狂言を下らないものにしてゐるのであつた。現在から觀ればこれは只、當時の伊勢土産の繪ハガキがはりのものでしかないのだ。貫を所謂「親讓り」の型で扇雀が見せるが、その内容からして宮本武藏の澤庵和尚に及ぶべくもなきことを、扇雀自ら熟考して今後の活躍に望むべきだ。

菊次郎のかさねは菊五郎一座で長年刻苦精勵を積んで來た甲斐だけのことはあつて、如何にも大芝居の人らしく應揚でコセ付かない處が第一に印象に殘つた。容貌を何處かに梅幸を彷彿さすところがあつて、女形饑饉の折柄、此の人の將來にも却々重要な役目が懸けられて居ることを考へるともなく考へたが、惜むらくは華かな味と色氣に乏しい怨みを擧げねばならないことを殘念に思つたのである菊之助と云ひ、此の菊次郎と云ひ、共に沈んだ感じの人ばかりだから、此の次には是非、歌舞伎の持つ獨特の華かさを身上とした女形を養成すべきであることを、菊五郎に希望したい。

菊次郎には野菊の可憐さと淸楚さとがある然し僕は罌粟の紅さを持つた女形もあつてもいゝと思ふのである。

澤田氏と——

日比谷・野外劇

藤俵丈夫

一瞬にして帝都が、阿鼻叫喚の巷と化し終せた大正十二年の九月一日……。

あの日あの午後、例の象潟署事件に連座して、その當時は、賭博被疑者と見られてゐた澤田氏が、數十名の座員とともに假釋放の身柄となつて歸つて來た。

歸つては來たものゝ、世間では——

『澤正が淺草で殺されたそうだ。』

『いや、賭博で檢擧られたんだ。』

『白服が血だらけになつてゐたのを、俺がこの眼でちやんと見た。澤正は殺されたよ。殺されたのか本當なんだ。』

といつたやうなデマが飛んで……これが正確な報導機關を失つてゐる灰燼の帝都へ、流言蜚語と一緒になつて廣がつて行つたのだから、推して想像が出來るやうに、すつかり犯罪者扱ひの、白眼視を受け勝ちになつてゐた。

おまけに、公園劇場に立籠つてゐた關係で淺草附近に居を構えてゐた座員の多くは殆んど家を失つてしまつた。僅かに、本郷東片町の私の家だけが、やゝ無事に殘つてゐたので、全座員がここに集つて、自炊生活を始めた。

すると、澤田氏が、

『徒食は絶對にいかん。直ぐにも九州巡業に出かけやう』。

といふ提議に、一同は双手を擧げて贊成する。就ては、出發に先立つて、吾々ともにこの東京でこの震災に逢つた人達を、何等の慰安もない燒野原同然の、沈默の都に置去りにするのは本意でない。何とかしておびえ切つてゐる市民の心に、慰めとなり想ひ出ともなるべき仕事を置土産にして出發しようではないか、といふので、罹災市民慰安を目的としての野外劇を日比谷公園新音樂堂に開催することに一決した。

相談は一決したが、さし當り開催に必要な衣裳小道具といつたやうなものが一つもない。それではといふので、十數名の座員が衣裳や小道具などの工面に大阪へ下つて行く。

澤田氏と私とは、早速、新音樂堂を借りるべく市役所へ交渉に出かけたが、市では澤田氏が假釋放の身柄であるといふので容易に快諾してくれない。これでは折角のプランもオヂャンである。或は國民文藝會の理事結城禮一郎氏の斡旋でも得られたら、何とか市の方へも交渉がつくかも知れない。とにかく結城氏の斡旋を乞はうといふので澤田氏と同道、四谷の結城氏のお宅を訪れることになつた。

その日は丁度、雨あがりの翌日で、冷風のたち初めた秋口だといふのに、澤田氏は久留米絣の單衣一枚、帽子もなければ袴もなく、薄汚れのした駒下駄を履いてゐた。假釋放といふ身柄の、薄暗い影を浴せられて眼玉をギロつかせながら、あんな風態で私の先に立つて歩いてゐた澤田氏の後姿は、今考へても、ふと淋しい氣がする。私として、澤田氏以上の風態でなかつたのは勿論だが……。

丁度二人が四谷見附にさしかゝつた時、ぞろりとした着流しの上へ、瀟洒な一重のインバネスをひつかけた新劇の某俳優氏にばつたり出つ喰はした。

先方もこちらに氣がついたらしい。勿論こちらは氣がついてゐる。

が、知つてか知らずにか、某氏はふつと視線をあらぬ方へそらせてしまつた。顏の合ひ次第挨拶をする心算であつたらしい。澤田氏は、その容子をみて

糞つ！

とひとりごとを呟いたやうであつた。同時にあの妖氣を含んだ瞳はゞいまに見ろゞといふ風に、不屈な意力を見せて輝いたのも確かである。

いよ〳〵四谷の結城氏の玄關に着くや『恐入りますが、雜巾をかして下さい』。この訪問第一聲に、結城家の家人の顏にはやゝいぶかりの色が現れた。

が、雨上りのぬかるみを歩いて來た澤田氏が、雜巾で足を拭き清めてから座敷へ通つたのを見るに及んで、つと胸を衝かれたらしい結城氏が、快よく市への交渉斡旋を引受けて下すつて新音樂堂の使用を許されることが出來たが、これといふのも、この『雜巾を借して下さい』の一言が、いたく結城氏の心を動かして、氏の眞面目を知られたゝめであつた。

その時の出しものが、これまた勸進帳であつたので、これも一應、市川宗家の許しを得なければならなかつた。といふのは、その以前、既に新國劇は、淺草神戸などで勸進帳を上演してゐたが、その際市川家より今後は上演罷りならぬといふことになつてゐた。

澤田氏を先頭に、斡旋役の結城氏、そして私の三人が市川家を訪れて、野外劇の主旨を述べ、許諾を乞ふと、ます子未亡人並に市川三升氏夫妻、新之助氏など宗家一門の方々が居並んでゐて、なか〳〵うんといつてくれない。

新之助氏だけは、斯うした際に於ける主旨が主旨であるからといふので、幾分許諾

の色を見せてくれはしたが、三升氏夫妻は當時やかまし屋で通つてゐたます子未亡人の手前もあり、又これまで新國劇が上演した時の出來榮えなどの關係もあつて、どうしても許してくれない。

すつたもんだの末に、やゝ憮然とした澤田氏が、獨り言には大き過ぎる聲で、こんなことを云ひ出した。

『仕方がない。道義上許しを得に來たが、斯うなつたら許されなくともやる。こんな非常の際に、僕がやつたら、あの男（故市川團十郎氏）のことだから、きつと地下で喜んでくれるに違ひない。』

これには一同、呆氣に取られて、流石やかましやで通つてゐたます子未亡人までが、ぐうとも云はない。

團十郎氏沒後の間もない當時で、梨園の神樣とも思はれてゐた市川團十郎師をつかまへて——あの男のことだから——なぞとやり出したのであるから、度膽を拔かれたのも無理はないし……。

腹の中では、何と無禮な書生ッポと思はれたか、或は藝に熱心な油斷のならない男と思はれたか、それはどちらともはかり知れないが、とにかく、もやもやつとした雰圍氣の中で、遂に許を得てしまつた。

最後のどたん場になると、何時でも不思議に、あの熱と意氣の魅惑力を出して來る澤田氏であつた。

遂にいよ〳〵日比谷公園新音樂堂に於ける罹災市民慰安の野外劇『勸進帳』上演のことが發表されるや、當時歌舞伎、明治、市村座などの錚々たる三味線の名手連が、吾も吾もと贊助出演を申込んで來てくれた

普通の場合ならば、新國劇なぞへはとても出演して貰へない人達ばかりである。

それがあの音樂堂の舞臺にならびきれず一日替りで三日間、三組の人々に出演してもらふといふ盛況。中でも、當時市村座にあつた住田長三郎師の如きは、あの地震の當日、市村座の三階より飛び下りて足を挫き、松葉杖をついての出演には、あの通り感應風發する澤田氏であつから、出るにも引くにも住田師の手を引き足を添へんばかりの送り迎へをしたことを見て覺えてゐる

斯くして震災直後——灰燼の都——おのゝきふるへる沈默の帝都の市民へ——はなやかな慰安の、——絃鼓の第一聲を贈つた彼——

澤田氏の熱と意氣こそは特筆大書に價するであらう。

この三日間の野外劇が、萬雷の拍手に迎えられて、事件の汚名も晴れ、一座を引連れてすが〳〵しく九州の旅へ發つことが出來たのであつた。

その當時の澤田氏が心境を詠つたものに次のやうなのがある。

地震にも劫火にも克ちしこの魂
人の情に絕えず首肯る。

私の歌舞伎考

笈川武夫

——歌舞伎は坐つて酒を呑みかけ聲を聞きながら觀るもの、新派は情婦と二人で觀るもの新劇は、ノートと鉛筆をもつて觀るもの——誰かが、こんな事を云ひました。この言葉には何處迄の眞意があるかどうかは判りませんが、極く輕い意味で面白い言葉だと思ひます

粹で綺麗で其の酢いも辛いも嚙み分けて、夫々並々でない苦勞の種を背負つて、——つまり物のあはれを知つてるくろうと筋の情婦と二人でしんみり觀る時に、あの新派劇の情緒がひし〳〵と胸に響いて來るやうに、歌舞伎劇のケンランたる藝術は、酒を呑み乍ら淘然として、紀の國やーと言ふ聲を聞いて、始めて舞臺と客席の混然と融合した中に、その眞髓に觸れ得ると云ふのでせう。

この事は決して酒を呑み乍ら觀る芝居と、歌舞伎劇を輕蔑したことではないだろうと思ひます。

この淘然とした境地には誰でもが直ぐ這入れるものではなく——それこそ昨日や今日の駈け出しの演劇青年等は言ふ迄もなく——長い間の浮世の苦勞に、處世上の困難に揉まれて、生きた人生の勉强の第一課から第何課迄も充分に經て來た人達に依つて、始めてこの無我の三昧境に這入れるのでせうから。唯酒を呑んで、醉ばらつて、ウアイーと許り見るのではなくて、其處に立派な鑑賞眼が生きた經驗から積上げられてあることを要求されてゐるのでせうから。

この意味で私は、坐つて酒を呑み乍、かけ聲を聞いて、本當に淘然として、歌舞伎芝居を見得る境地に這入つてゐる人を、羨しいとも思ひ、尊敬も出來ます。

洋酒・食料品 罐詰問屋

株式會社 横山商店

大阪市東區豐後町三番地

電話東94代表三八六五番

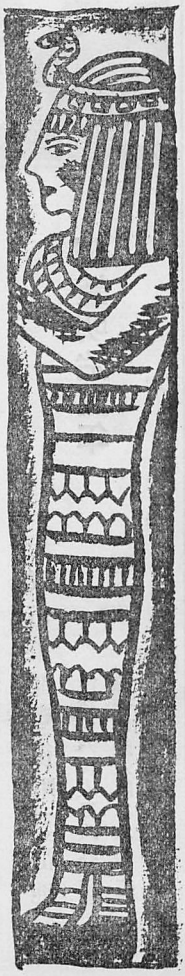
振替口座大阪二八四七番

創業明治五年

酒場劇

僕の芝居はこれで三度阪神で上演されて居る。〃仇討輪廻〃は前進座が神戸で上演したのと、脚色劇〃男裝の麗人〃を水谷八重子や小太夫等が寶塚で上演したのと、今年の三月中座で井上正夫、阪東壽三郎の一座で〃國芳の出世〃が上演されたのと。

前進座ので見たから時は名古屋觀に來なかつた。〃國芳の出世〃の時は僕のやつて居る〃劇場〃の支部會を兼ねて出張つて來た。〃國芳の出世〃は國芳の亂醉の痴態を遺憾なく晒けた芝居だが、その國芳劇を僕は二階の桝で酒を飲みながら觀て居た。舞臺の國芳も泥飲して居たし、見物席の僕も泥飲して居た。



―道頓堀・創刊十周年を祝して―

再出發

井上正夫

（新道の男爵に扮した井上）

早いものですね。『道頓堀』ももう十才になつたのですか私が平將門を東京土産として提げて行つた頃はやつと誕生して間のない頃だつたと記憶しますが如何。

私も此の十年間には相當變りました。でも去年から今年にかけて程の變化は近時一寸ありません。

明治三十年、十七才で役者になつてから、五十六才になつた今日までに、これほどハツキリと心境の變化を來したことは自分としても驚くほどです。

人生僅に五十年、といつてもこれは昔の言葉で此頃は流行らない。でも私は其の人生に六回オツリを出してゐる。だが今からでもおそくはないと氣付いて再出發しようと決意したとたんに、道は拓け、その遠かなる前途に輝く光明

デパート

豊田豊

しかしこの大阪の劇場が酒を飲みながら觀られるのは實に有難い東京では今はもう淺草でなければ見物席で酒なんか飲んで居られない。酒を飲みたいヤツは、暮間に食堂かなんかで、醉を買はけなければい。それもぢつと觀て居ると、だんがさめて來て、さとして來て、何んに舞臺の刺戟が惱勢ひ僕等のやうな酒の習慣性のどうにもならない男は結局食堂に這入つて居る時間が多くなつて、觀劇が中途半端になる。

しかし僕も長谷川伸に劣らず觀劇は勉强のつもりなのだから、何んとかして、熱心に觀やとする。で、芝居を觀るとなると痛醉し切つて醉がさめないやう豫めを認め得たのです。

だが此の途を歩くことは多難です。

再出發、今日までの經驗五十年を切捨てての再出發です新しく六つの少年となり、演劇一年生からやりなほす意氣をもつて去年の暮、長年住み馴れた新派といふ家から離れて獨立したのです。

朝起きて、飯を食つて、芝居をして、寢るとゝふ毎日を安逸に過すだけなら、所謂『新派大合同』といふ屋根の下に居る程、暢氣で樂なことはない。責任を分擔するといふことだけでもどんなに氣安いかも知れない、それを、その安住の地を自ら飛び出して、今年の一月から更めて演劇を勉强し初めたのです。

人生最後の努力です。

だがどんなに努力をするとしても、どんなに頑張つたところで、今後の生命には限りがあるし、俳優としての生命を自覺してゐます。それを敢てやるのです。

何故私が今更になつてこんな道を選んだかといひますと現狀のまゝではきつと行詰つてしまふだらうと豫測するからなのです。だからこそ何とかして打開の道を切り拓かなければなりません。こんな意圖のもとに私の選んだ道がたまたま『中間演劇』と稱されて大分諸方で問題になりました。

だが『中間演劇』といつても尺度で測つて此處が丁度新派と新劇の中間だから此處を歩かうといふような、曖昧な妥協的なものではありませんし、又そんな都合のよい點が容易に見出されるものでもありません。ただ現狀に甘んじて居られないのです。半歩でもいゝから前進したいといふ熾烈な欲求によつて、前途多難な此の道を切り拓いて行きたいのです。

私の今度選んだ道に對して良い指導標を樹てゝ下さつた方もあり、又今にして方向轉換しろと御注意下さつた方もあり、あれこれと未だに批判されてゐますが、私自身は確信をもつて現在の道を押し進んで行くつもりです。

今後多少の、いや大きな困難が伴ふだらうといふことも當然豫測されますが、駑馬は

飲んで出かけるか、でなければ觀劇中醉がさめない樣に幕合に一氣にしたゝか飲む。終ひには隨分苦しい智惠を絞つて、こつそりサントリーの瓶を懷ろに忍ばし、時々間を見て飲むやうな方法も案じ出したが、客席の暗い時はないが、明るい舞臺の俳優が何んだか僕ばかり睨みつけて居るやうで神經が落着かない。結局この名案は駄目になつた。

但し築地小劇場の新劇を觀る時はこの苦肉の計を用ひる。なぜならあすこの食堂は夏だけはビールがあるが、その他の季節は一杯五十錢のキングジョージーがない。こいつをガラ〳〵飲んで居ては、到底經濟が支持し切れない。で、築地の春、秋、冬だけは仕方がないから、一本一圓のサントリーを觀客席の暗がりの中に活躍させる、仕合はせなことに新劇は大抵舞

駑馬なりにゴールへ向つて突き進んで行く覺悟です。

此のゴールとは藝術的な大衆劇、或は新しい現代劇の確立にあるのです。だからこそ私や私の周圍の者は此の道を拓き、築き、鋪裝し上げて行かうとして、今汗みどろになつて協力しつつ、その工作をやつてゐるのです。そして其の道を私自らが進むと共に同伴者、並びに後繼者を造らなければなりません。但し後繼者といつても名前だけの井上正夫二代目を造らうといふのではありません。

私の仕事を傳へる後繼者を造り上げて殘して置きたいのです。そして私の最後の仕事の足りなかつた點を、至らなかつた所を補つて貰ひたいのです。だがこれは言ひ易くして、行ひ難いことです。それに人を造るといふことはなかなか容易なことではありません。

もつと早く氣付けばよかつにのですが、今日までの人生を餘りにも安逸に、無爲に過してしまひました。そのことを最近つくづく恥かしく思ひます。

だがこれからは大いにやります。

私は青年です……未來永劫の演劇青年です。だからこそ私は生命のある限り努力を續けようと決意したのです。そしてこれからこそ私の本當の仕事が出來るのではないかと思つてゐるのです。

その仕事の一つとして今年の四月二十一日、芝の明舟町二十二に演劇道場を開設しました。

此の道場の目的は既成座員の再教育、即ち新派で修業した技藝を土臺にすると共に、身にこびりついた古い殼を叩きこはし、新しい進歩的な演技の訓練を施すこと。前述の後繼者を造ること等々です。

今日、一部では演劇の苦悶時代とも稱されてゐますが、私はさうは考へません。

成程私自身も苦悶してゐます。だがこの苦悶は明るい苦悶です。前途に光明を感じる苦悶です。だから私は敢て演劇の、劇界の前進時代だと聲を大にして叫びたい位です。

現に十月、中座興行の演目を見て下さい。これは明かに

酒・劇場・デパート

臺だけを明るくして、觀客席を暗くして居るから、被害妄想症に惱まされずに濟む。それにしても帝都の唯一の新劇道場たる築地劇場は冬は冬とて舞臺脇から寒い風が吹き込んで來るし――世にこれを稱して築地颯しといふ――。夏は夏とてうだるやうに暑いし、惱ましき者ひとり僕だけではない

その點になると大阪、神戸、名古屋の劇場のある程度は德川時代の美風を繼承し、觀客を區役所かなんかのやうに束縛しない。名古屋の歌舞伎座は前進座と、先月幸四郎、仁左衛門、時藏、田之助等で又〃仇討輪廻〃を演つたが、これだけの大一座がかゝる芝居でありながら、場内におでん屋があつてコップ酒なんかを呑ましてくれる。その點東京の築地小劇場なん

思ひ出を語る

都築文男

我々の意圖の現れであり、演劇の、興行の前進を如實に語るものであります。

今、昭和十一年にして澎湃たる演劇運動興隆の氣運を身内に、又身近に犇々と感じます。

此の氣運の下に演劇運動が多少とも向上するならば私の喜びは絶大です。

どうか我々の此の眞摯なる行動を鞭韃し且つ御支持あらんことを大方の諸氏に切望致します。

一一・九・二六

兎に角、時勢の推移はおそろしい、明治時代人も怖れた刑場だつたと聞く千日前が、大正から昭和へかけて、樂天地を中心とするあの驚異的歡樂境の隆盛となり、現在では極東にその建築美を誇る歌舞伎座と大阪劇場の聳立となつてゐるのである。

假りに十年前の道頓堀千日前の色彩しか知らない人が、現在その色彩を求めようとするならば、それは不可能であらう、十年の歳月がその色彩をすつかり消耗してしまつてゐるのだ。

十年前は、現在では殆どその形を停めてゐるに過ぎない芝居茶屋が繁榮してゐた。自分の事を言ふのは可笑しいが、「都築さんが通る、通る」と芝居茶屋の美しい娘さんや、お茶子さん達が囃し立てゝくれて首根ッ子が痛くなる程お辭儀をした娘さん達に、今ひよつくり出會つてもみんな子供の手を引いたり抱いたり、母と名の付く人々になつてゐる。

その度び毎に、都築も親爺になつたと泌々感じる。これも十年の歳月だ。

その頃誕生したばかりのカフエー赤玉、何々：：等は、ほんの僅かしかない白エプロンの女給さ

かも少し見習はしたいと思ふ。

あゝいふ寒い無産智識階級相手の劇場はおでんやなんかを開店すれば、體が暖まつて自然に暖房裝置の代りになるので、なければ一杯十錢のスタンドなんかやれば、これは築地小劇場らしくてハイカラで好い。

東京のデパートなんかも皆三越の例に倣つて、食堂で酒を賣らなかつたものだが、關西から進出した高島屋がさういふ小ブル的儀禮を哄笑して、地下室の食堂に關西式の一品料理を設け、國冠や大關なんか芳醇な奴をふんだんに樽から飲ませるやうになつた。

それから高島屋に倣ふ二三のデパートも出來たが、いづれにしても僕なんか家内と買物に行く時、家内が着物の柄を半時間も一時間も選擇するお附合は眞つ平だから食堂で一杯飲みながら家内を待つんによつて好奇の眼を瞠らしたものだが、現在の赤玉、マルタマ、の女給群に至つては犯濫と云ふ外に適切な言葉が見當らない程の豪勢さ、試みに午前一時半頃、道頓堀から南海難波にわたる區間を漫歩して見給へ、殊に南海電車の構内に至つては八分通り女給さんと言つても過言ではない。

芝居茶屋避難民ほど
脊負ひ込み

と云ふ川柳がある。十年前を追憶すると、そゞろ寂しい氣持がする。芝居茶屋の衰滅には種々原因もあらうが、こゝ十年間の映畫の進出に演劇が壓迫せられ、傳統を誇る道頓堀にも、忽ち辨天座が映畫に鞍がへするやうな結果となり、爲に芝居茶屋が自滅の道を辿つたのである。

（新道の朱實に扮した水谷）

道頓堀舟乘込み

水谷八重子

懷しい道頓堀情緒……
小屋の表の櫓下に飾られた幟、美しく灯の入つた軒提灯に積上げられた積樽、前茶屋
ひら〳〵とひらめく小旗奇麗の軒を飾る花のれん等、昔な

映畫のこの十年間の進出と云へば、先づ無聲から發聲映畫へ、キャメラの編輯が立體化し、最近に至つては總天然色映畫の完成を見てゐる。舞臺はどうだらう。裝置や照明法に新鮮味が加へられた程度で、舞臺側の敗慘は、火を見るより明らかだ。

芝居と云へば、道頓堀と、全國的に知られたこの傳統を誇る道頓堀が、映畫館三、演劇場三の對勢力を以てしても覗はれる。

現在關西新派劇と銘打つて、毎月繼續で奮闘してゐる自分が、丁度十年前の正月、喜多村綠郎氏と、矢張り角座に於て、第三次成美團を組織し劇場も割れんばかりの好況を偲へば、そゞろ秋のうら淋しさに似た哀愁を覺ゆ。雜誌道頓堀の十週年を祝して筆を描く。

酒・劇場・デパート

ことの出來るデパートを選ぶことになる。家内もそれの方が急ぎ立てられなくて氣樂だし、結局夫婦が高島屋へ禮讃といふことになるだから酒を賣らないデパートはデパート同志の競爭に自然負けて行かればならないし、反つて今日では非文化的といふことになる。

劇場も椅子席の方が進歩的文化的といふことになつて居るが、聽て歷史の再進展するところ客席で酒を飲ます、舊制度への還元がより進歩的、新時代的といふことになりはしないだらうか。その點道頓堀の劇場は來るべき時代の先驅者たるべき將來性を豊かにはらんで居ると言へる。何も〃道頓堀〃といふ雜誌に原稿を書くからお世辭をいふのでないが、僕は誠心誠意道頓堀謳歌演劇論者である！

からの芝居情緒をその儘殘してゐる道頓堀の姿が美しい繪草紙の樣に眼の前に浮かんで參ります。緋毛せんを敷いた棧敷でお食事を攝りながら芝居を見てゐらつしやる光景も何とも云へないのんびりしたお芝居氣分が漂つて居ります

東京では震災後こうした情緒は全く影をひそめてしまゐました。大阪でも近年歌舞伎座が出來ましてからはこうした情調にひたる事が出來ませんでしたが今度六年振りで懷しい道頓堀の中座に出演致します事になりましたので久し振りでこうした昔ながらのお芝居情調が味はへます事を嬉しく存じて居ります。そして私の思ひ出の頁を繰りひろげて參りますと其處に先づ浮かんで參りますものは大阪の皆樣のあの賑やかな御熱心な御歡迎の光景で御座ゐます。それは忘れもしない昭和四年六月中座出演に當りまして古式にならつて行はれました道頓堀舟乘込の日の賑やかな光景でございます。私が藝術座を率いて九州中國地方から滿洲朝鮮まで巡業して參りました翌年亡くなられました伊井蓉峰先生初め喜多村先生河合先生梅島さん花柳さん等新派の方々と大合同で初めて大阪の地を踏みました時で「受難華」の壽美子の役でお目見得致しました外『原敬』『クレプトメニヤ』『怪談小車草紙』を上演致しまして大層御好評を頂きまして連日大入滿員で花道にまでお客樣をお入れ致しましたので『受難華』で花道の引込みの時お客樣の間を分けて通らなければならない樣な盛況でございました。

丁度其日は蒸暑い日で御座ゐましたお畫一寸過ぎ頃道頓堀から舟に乘り込みました屋根舟の軒には『新派大合同』とか『水谷八重子』とか染抜いた紅白の幕を飾り提灯を提げ舟端に緋毛せんを敷いて其處に坐つてお辭儀をしてゐるので御座ゐますが伊井先生方は別の舟にお乘りになり其の他にお囃子の舟がついて賑やかに離し立つて舟は櫓で漕ぎながらゆるやかにすべり出でゝます。その後に道頓堀のカフェーやお茶屋さんの舟が澤山ついて之が樂隊や鳴物入りで大變な賑やかさで川は舟が

夢と現實と

中村翫右衛門

ある時は小兒の如くタドタドしく、またある時は思ひ切り大胆にのし〳〵と歩いたと言つても、その凡ては創立當時の苦しい憶出の中に驅け込んでゐるのでありますが、前進座が、眞に、對外的對社會的に確實なステップを、然も可能な限り、科學的整理の上に立つて、歩み續け得ることの出來た大きなものゝ中に、大阪に於ける道頓堀進出のパーセンテーヂを否定することが出來ません。

浪花座へ最初に乘り込んだ當時この芝居情緒の深い小旗と櫓下の飜つてゐる風景の印象と共に、豫想以上だつた浪花座の表に流れた藏入り旗を眺めて、思はず涙ぐんだ記憶が今尙、思ひ出す毎に生々しく胸をつまらせるのである。

自分の苦勞話をする程、ある意味で厭味のものはないが、私達もそう云つた態度をぬけて、もつと十周年記念、十五周年と未來を考へることに專念する快意である。どんなことであつても過去を憶ふことのセンメンタル性を、私達の中から稀薄にすると共に東京への光明を强めたいと思つてゐます。

動かぬ樣に一杯でした橋の上も兩岸も黑山のやうな見物で水谷とか八重ちやんとか聲をかけて下さるのです。中の島公園まで參りまして一休み致して又同じ川筋を漕ぎ廻つて道頓堀の戎橋に着きました時は夜の八時頃で御座ゐましたその永い間舟端へ手をついてお辭儀の仕通しで御座ゐますからたまりません。伊井先生方の舟は大勢さんでゐらつしやいますので交替なさいましたそうですが私しの舟は一人きりですからそうした藝當も出來ませずいつも笑顏でゐなければなりませんし『水谷』『八重ちやん』と聲をかけて下さいますとその方を振り向いて頭をさげます有樣で足はしびれてしまゐますし、首は痛くなりほと〳〵弱つてしまひました。橋の下へ參りますと、やれ嬉しやと足をくづしてさすりますがすぐ舟は又川面に出てしまゐますので大急ぎで坐り直してお辭儀を始めます有樣で舟の中では私しの心も知らないでお壽司やサンドキツチをぱくついてゐる男衆やお弟子さんの樣子を見るとうらめしいやら情けないやら泣きたくなる顏を强いて笑顏に作つて居りますのでしまいには顏の筋肉がこは張つてしまつて自分でも感じがなくなつてしまつて指で上唇を引ぱらないと唇が合はない樣になつてしまゐました。八時頃漸く青い灯赤い灯の燦く道頓堀に戻りましたが何しろ大變な人出でうつかり上陸しましたら御見物の方にもみくちやにされてしまゐますのでそつとモーターボートに乘換へて電氣を消し外へ行きまして人のゐない處でやつと上陸致しました。

今思ひ出してもあの時の弱つた樣子に思はずふき出してしまゐますと同時にあの賑やかなそして御熱心な御歡迎振りに嬉し涙が湧いて參りますこんな賑やかな舟乘込はかつてなかつたとのお話しで心から喜んで居ります。

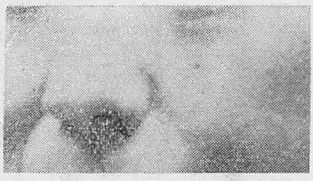
東京大相撲

十月九日より十一日間（晴兩不論）

無敵三横綱を
はじめとし幕内五十力士の堂々來場

大阪堂島
大橋北詰

勸進元・松竹興行株式會社
協賛・大日本相模協會



（鶴治郎の鼻）

名優と鼻

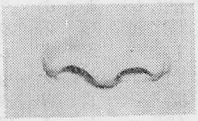
中井泰孝

洋の東西を通じて、古今の名優に鼻の共通點を見出すことが出來る、古來名優と云はれた人の鼻は總じて大きい、尤も名優ばかりでなく、世の偉人とか怪傑とか云ふ人、即ち群を抜く秀れた人の鼻は大きい、その意味で矢張り衆を擢でた名優の鼻の大きいのに不思議はない譯である。

今此の鼻を、骨相學から觀た形狀に依つて、之れを喜劇俳優に適する鼻、悲劇俳優に適する鼻、性格俳優の持つ鼻、實惡を得意とする俳優の鼻に分けて見る。

一般に鼻が大きくて、鼻孔が下方に頬に向つて引延されたやうになつて居る人は俳優としての才能があると云はれてゐる、即ち此の鼻の持主は模倣性に富むからである、そこで此の鼻孔を有し、若し鼻尖が鋭く尖つて、多少下方に垂れて居る鼻は喜劇俳優に適し、從つて成功する。即ち機智と諧謔に富むからだ。

此の鼻の所有者の筆頭に、先づ何と云つてもチャールス・チャツプリンを擧げなければなるまい、次にバスター・キートンがゐる、而かも兩人共マツク・セネツトの門から出た米國映畫界の至寶、否世界隨一の喜劇名優である事は誰でも知つてゐる更に近來活躍して居るカンターあり、ロイドがある、東洋に覇を唱ふ名優に、曾我廼家十郎あり五郎あり、十吾あり志賀廼家淡海がある。



（十吾の鼻）

以上の名優達の内、曾我廼家五郎を除いた外は、共通して奇劇型の鼻の所有者である、獨り曾我廼家五郎の鼻は全く反對で大きく而かも横に開いてゐる、此の鼻は骨相から云ふと大事務家、大興業家などに見る鼻で、強いて此れを俳優型に當て嵌めるとすれば、どつちかと云ふと性格俳優型に屬する、それかあらぬか、常に五郎の演技は、喜劇の中に織り込まれた悲劇を好んで演つてゐる。蓋し喜劇型の持主でない所以かも知れない。

（鼻の上非）

以上喜劇型とは反對に稍鼻頭が圓味を帶び、鼻翼が後方に引かれたやうになつてゐれば、それは悲劇のうまい俳優である、此の悲劇型の所有者に、先づヘンリー・アーヴイングを擧げることが出來る彼は英國の產んだ偉大な名優である、彼の初舞臺はサンダランドのライシーアム

座だが、その天授の技を認められたのはそれから五年後の一八六五年、ハンテイツド・タウンの悪役ロードン・スカダモアに扮した時である、そして更にゲーテのファストを熱演するに及んで一躍世界的名優の折紙をつけられた彼の鼻は甚だ大きく、そして高く、即ち豪放な演技に富む所以である、悲劇俳優にして一方實悪の役にも成功した點がそこにある

（鼻の海淡）

此のアービングに共通した鼻の持主に、我が中村鴈治郎がある、悲劇の二枚目、豪放な武者もの等々、演じて可ならざなき點に於てもまた彼とよく共通してゐる、更に悲劇型の持主に同じく英國が產んだ女優、エレン・テリーがある、その出は矢張り梨園の名門で一と頃ヘンリー・アーヴイングと一座を組んで、ハムレツトのオフイリアを演ずるに及んで彼女の名聲は英全國を壓倒したと云ふから物凄い、彼の有名な近代劇の先驅者ゴードン・クレーグは彼女のお腹から出た子供である。テリーと時を同じふして歐羅巴に並び稱せられた悲劇の名優に、フランスのサラ・ベルナールがある、彼女が最も活躍した時代は一八五〇年から一九二〇年頃の間で、一九一四年に片脚を切斷して、生れもつかない不具者になつたがそれでも矢張り舞臺を續けてゐた、彼女は抒情的な舞臺に富み、言語の正確で有名だつた、彼女は舞臺の上に名優であると同時に、一方劇場の座主として經營の手腕も頗る鮮かなものであつた。以上の人達はその鼻の悲劇型の點で共通してゐることは勿論だが、此の型の所有者にして、我が喜多村緑郎があり、且つ大きな鼻で廣く知られてゐる女優森律子、岡田嘉子がある。

（澤田の鼻）

秋に思ふ

年齢

行友李風

いつもながらの事ですが、幾ら技藝は拙くても、自分より年長の俳優の舞臺に接すると、何かしら必ず新たに教へられる點があります。人間無駄には年をとりません。それから下らない端役や仕出しの人達の中に、偶々巧い、味のある藝を見つけた時の歡び、まるで我事のやうに嬉しく思はれます。

復興

野淵昶

青年歌舞伎の復興を何よりも悦しく思ひます。次の時代の俳優養生のためにはこれほど結構なことはありません。

壽三郎中心の劇團も何とかして再興したいものです。第一劇場よりも、もつと大衆的な存在であつてほしいですね。

延若、梅玉、魁車の諸氏には大阪歌舞伎のために大いにがんばつてもらはねばなりません。三人の此の圓熟精緻をきはめて演技に感

更に鼻全體に（鼻根、鼻梁、鼻頭共に）肉つきが豊かで、鼻孔大きく圓いのは性格俳優に共通した鼻とされてゐる、此の型の持主に、米のジョン・バリモアあり獨のエシール・ヤンニングスがある、バリモアはアメリカ劇團隨一の名門の出で父祖姉兄いづれも名優と稱せられてゐる現在姉のエセル・バリモア、兄のライオネル・バリモアと共にバリモア三兄弟として米國劇團及映畫界に其の名聲の高いことは今更喋々を要しない。彼ジョン・バリモアの持つ鼻は性格型の代表的なものであることは勿論その美しさと整然さに於て甚しく有名である、〃百萬弗の横顏〃と價打ちつけられて居る彼の美しい容貌の中央に此の有名な性格型の鼻が屹然と聳え立つてゐるのだ、エミール・ヤンニングスは、現代の映畫俳優として、〃ラストマン〃歎きの天使〃〃激情の嵐〃などで性格的な深刻な彼の演技を我々は餘りにもよく知つてゐる、一八八六年頃に、それまで船員だつた彼は忽然職を轉じて舞臺俳優となつた、彼の持つ尨大な鼻は押して行く力、卽ちはち切れるやうな遂行力の旺盛さを物語つて居る、彼の映畫の隨所に現れて來る默然として目を据え附けたやうに微動だもしない緊張は彼の押して行く力の強さに外ならない。此の鼻の持主にして我が九代目市川團十郎があり六代目尾上菊五郎がある、更に新派劇に、故村田正雄があり、現在の井上正夫がある共に最もよく性格型に共通した鼻を持つてゐる。

（菊五郎の鼻）

最後に實惡を得意とする名優に共通してゐる鼻であるが、此れは無論横幅も大きいが、とりわけ其の高さに於て隆々平然たるものがある、そして少しく鼻頭が鷲嘴型に垂れて居る、此の型の名優として餘りにも有名な、鼻高の幸四郎、鼻

心してゐるのは、僕ばかりぢやないでせう。

俳校劇團

森　ほのほ

俳優學校劇團の「馬盜人」や「紐」は確かに京阪劇壇への清凉劑であつた。餘りにもクダらぬシバヰばかりがシバヰらしい顏してノサばつてゐる中に、これだけが本當にシバヰらしいシバヰだつた。それがどういふ理由からか九月から休演だ。私は疾やくも秋の哀れを感じた心地だ。第一劇場が嘗の如く再生せられるならば、それと同時に學校劇團の共演を希望さしたい。切に。切に。

方法

山口　草平

大いに若手芝居を奬勵して、他日の大成を期せられたし、これが大阪劇壇を盛にするたゞ一つの方法だとおもひますが…

秋

澁谷　天外

爽快な秋が、しのび足に寄つて來て、空色

の三十郎を擧げることが出來る、鼻高の幸四郎とは即ち五代目松本幸四郎のことである、安永頃は市川高麗藏を名乘つて居たが、寛政九年上々吉となり、市村座で五代目幸四郎を襲名したのは享保元年十一月であつた天保五年に古今無類の位に昇進し、同九年三月河原崎座に於ける藤原時平を最後として五月十日に死んで居る、無論其の當時に於ける實惡の首位であつたことは云ふまでもない、彼は鼻異常に高く、眼著鋭く凄味を帶び、正に理想的な實惡型だつたと云ふことである世人は皆彼を鼻高の幸四郎と呼んで居たそれほど彼の鼻は有名だつたのだ。

（五）郎の（鼻）

鼻の三十郎とは即ち三代目闘三十郎のことである、彼の容貌は五代目松本幸四郎に酷似して居たと云ふから、その鼻の高かかつたことは想像に難くない、此れも人呼んで鼻の三十郎、それほど有名な鼻である、彼もまた實惡を得意とし、元治元年に功上々吉に昇進、明治三年十二月に沒して居る、彼は勿論非凡な技倆を持つてゐたが、然し彼の演技には華麗さに乏しく、所謂質實に傾いてゐたので、一般受けはしなかつたやうだが、然し眞實の芝居を見る人達からは常に絶讃の拍手を浴びて居たらしい。

最後に鼻の變り種子を拾つて見る、此れは俳優の演技と其の型に當嵌つたものとは云へないかもしれないが彼のロシアの國寶、否世界の國寶シャリアピンの鼻を特殊な鼻として見逃す譯に行かない、彼の持つ鼻はその尨大さに於て、偉大なる藝術家の持つ鼻に共通して居るが、彼の鼻は純然たる猶太系の鼻で、即ち段鼻と云ふやつである、然し彼の美しい深底音歌者としての生命は彼の咽喉よりも寧ろ大きな鼻に包まれた鼻腔の廣さにあると云はれてゐる。

考へ

石河　薫

じいっとしてゐると、何んだか賢さうな考へが湧き出してくる。分別くさひといふ思ひがして、自分乍ら獨りでほゝ笑みます。

秋の氣配。すうッと充分に息を吸うた快さ！空は澄みたり、氣は清し。

も陽斜の色も、夏に左様ならすると、いつも故郷の京都の東山の出立の中でツク〳〵ボウシを追つて竹竿を持つて走り廻した幼なかつた時をなつかしむのです。普通の蟬よりも音樂的な鳴き聲を持つてゐるツク〳〵ボウシ、そして近づいた僕達子供の群にカタチョーッと捨台詞を殘して何處かへ行つてしまふツク〳〵ボウシ、木立の向ふには智恩院の大伽藍が聳え、やがて梵鐘の夕べの知らせに何匹かのツク〳〵ボウシの犠牲者を入れた袋を下げて、疲れた僕達は黄昏の京の街を歸つて行きます。秋、京の秋、そしてツク〳〵ボウシ。秋になると惡童であつた少年時の追憶の甘い感傷に浸るのです。

ドウトンボリ

ガイド

幕外に日本一の自信あり――グツと秋一つばいの力強さを思はせる十月の芝居街。

×

さて皆様、どこを御覽にならうとお思ひになりますか。では御案内申上げませう。

歌舞伎座――集團性の壓力をヒタ〳〵と胸に叩きつけるやうな今度の大歌舞伎は一日初日毎日三時開演で――第一「新編元祿忠臣藏」第二「十万堂の秋」第三上「保名」下「月大漁」開演前、この興行の成敗はかゝつて一座の編制力の强弱を以つて岐る、と評されてゐたが山と呼べば川と答へる義士の合言葉のやうに、ガツシリ組んだ手と手の迫力は、滿都の好劇家を完全に魅了してゐる。

（觀劇料、一等四圓、二等一圓八十錢、三等一圓三十錢、菊八十錢、櫻六十錢）

×

中座――は三時半開演で「紙幣」「夜中から朝まで」「兄いもうと」「助六大いに笑ふ」「新道」の五篇を上場するが、分けて井上水谷の名コンビで描く新道のよさには、若い女の客がヤンヤ……。

觀劇料は特等三圓八十錢、一等二圓五十錢、二等一圓六十錢、三等一圓二十錢、四等八十錢、五等五十錢

×

浪花座――前進座は待望の「勸進帳」と長谷川伸作「人斬り伊太郎」の大殺陣「嚙みついた娘」が大人氣、他に古劇「道行念玉蔓」を上場、いよ〳〵前進する前進座をおもはせる一日初日の四時半開演で日曜祭日はマチネー（十一時より）（觀劇料、特等二圓五十錢、一等一圓五十錢、二等八十錢、三等五十錢）

×

何かしら新鮮な工夫のある關西新派――角座は晝夜二回の開演で「醫者と商人」「嬰兒殺し」、「夜霧朝霧」「丁半暦」（觀劇料一等一圓七十錢、二等八十錢平土間五十錢）

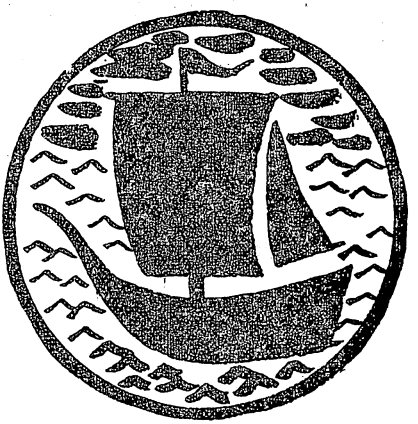
×

文樂座は三日初日、毎日三時開演の三巨頭總出演で「花競四季壽」「良辨杉由來」「御所櫻堀川夜討」「心中天網島」「釣女」。觀劇料一等座席三圓三十錢、一等席二圓七十錢、二等席一圓二十錢、三等席七十錢

續者欄

八月號で御案内申し上げましたが、愛讀者の御寄稿を歡迎いたします。

一、締切は毎月二十日。
一、範圍は演劇、映畫、レヴユーに關するもの。
一、一回四百字以内。（質實なものは特に長くても戴くことがあります）
一、宛名、大阪市南區久左衛門町八松竹ビル内「道頓堀編輯部」宛
一、但し原稿は一切返戻致しません。
一、誌上匿名は差支へありませんが原稿には住所姓名御明記のこと。



編輯後記

にかへて

源多德三郎

★ 皆様の御後援のたまもので、道頓堀誌も創刊十周年になる。

十周年を記念して、何か變つたクワダテをお目にかけやうかとも思つたが、誌の祝事のために少ない紙數をさくことはかへつて皆様に忠實でないユエンと自重しました。

★ ボクは、この八月號からの新登場で、未だ八九、十の三號だけしか手がけないので、ホンタウに自分の持つてゐるものはこれから見ていたゞく譯になるが、それについてお斷りしておき度い事は、ボクの今後の編輯方針のことであります。

★ 登場早々、餘り急に誌上の體裁、内容等を變へたので、ゲンタといふ奴は一體ドウスルつもりだらう——と御心配をかけてゐる向きがあるやうですが、ボクもはゞかり乍ら引うけてゐる間は責任は大いに感じてゐるから「道頓堀」を近代的「道頓堀」にする英斷はあへてしても近代的だがアれは道頓堀ぢやない——ものには十年の歴史に對して出來さうにもないし、せないつもりでもゐます。

★ しかし、ボクは若い。百年、何の進化もない歴史の國に立龍ることはいやば。一刻、一秒、時は後ずさりをせないものだ。いたづらに足ぶみを續け、腰を打下して寛ぐことは馬鹿でも難事でないから結構だがボクにはたへられないすくなく共時流に順應するだけの氣がまへを持つことはそして何か手段をこうすることはこの立場にある限りボクがなすべき義務だと信じる。

★ 但し、今は、未だ發展への準備期だ。希くは嚴正な批判はアト三四號のゝちにたまへ、謹んで諸先生の御鞭撻と御教示をお願ひします。

★ お知らせ—先月本誌に「鮮滿芝居の旅」をお寄せ下さいました關西梨園の名門、市川右團次丈が卒去されました。全く夢のやうです。皆様の御賛助を得て次號誌上で右團次丈を追慕したいと存じます。

★今月號も例によつて興趣本位、御執筆の諸先生方には謹んで御厚禮申上げます。（十月一日）

昭和十一年十月一日發行
月刊 雜誌『道頓堀』第十一年 第百廿一號

◇誌代は前金お拂を願ひます。
◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金二拾錢（郵稅壹錢五厘）

昭和十一年十月一日印刷
昭和十一年十月一日發行
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店
發行者 鳥江銕也
共同編輯 山上貞一 松本泰三
印刷所 道頓堀社印刷部
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興行株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部
編輯京都支部
京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始祖　辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹸

專賣特許　實用新案

スキナ御化粧紙
（あぶら取兼紙白粉）

各品共御愛用を乞ふ！

登録商標

發賣元　大阪　朝日堂株式會社

本舗　大阪　中田スキナ屋謹製

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十一年九月三十日印刷（毎月一回）
昭和十一年十月一日發行（一日發行）
「道頓堀」第百廿一輯第十一年十月號

良藥は口に苦し
田淺にきせんとだ・ゆ
とめに服き

深み行く秋の
保健に…
氣候の變り目
感冒、咳の御用心。
野に山に、觀劇に、
呼吸器を守る此良藥。

固形淺田飴

定價
三〇
五〇
一、〇〇
（到る處の藥店にあり）

「道頓堀」 第百廿一輯 第十一年 十月號

一部 金貳拾錢